

同窓生第二期（大正十一年から昭和六年まで）

病床で頂いた栗饅頭の折箱

（大、一、蚕） 小松 茂久

戦時中交通音信不便な時代とは言え、長野県蚕業試験場飯田支場に居りながら、先生の亡くなられたことを、告別式後迄知らなかったのは、終生の恨事であり申しわけの立たない次第である。せめて御生前中賜わった数々の事のうち、主なもの二、三について申し述べ、御霊前にお供えしたい。

自分は生来小心臆病者の上に身体も弱く、就職しても二回の病氣・退職・復職とジグザグ生活をしたので、其の間いつも先生の御教訓や激励、お慰めをいただき、手を引いて歩かせて貰ったのである。

学生時代数回御宅へ伺ったのであるが、学校の講堂では聞かれない身近なこと迄教えられた。岸善亮君（蚕九）と二人で上った時、懇々と性教育を受けたことは忘れられない一つである。

また世間知らずの卒業間きわ、御多忙の先生に期限つきで御染筆願ったことがあったが、自分の性格をよく見抜かれ「心広百物皆通」の書を期日までに書いて下されたのである。何時何処でこんなに自分にも気付かぬ自分を観察して居られたのか、感慨を久しうした次第である。深く肝に銘じ今も額として日常服膺して居る。

大正十一年卒業と同時に福岡県蚕業試験場に就職したのであるが、同十四年頃東京高蚕・京都高蚕をも含めての同級生より、昇給の後れることを申し上げ、また関の圧力を感じるので転任し度いと手紙を差し上げた所、「今は各県とも経費節約の折柄急に所望の所も出来難いので、時機到来迄現職に倦怠の風なく精励せよ、当方に於ては適機を逸せず」云云と誠めの御手紙を頂いたのである。今にして思えば我が儘浅慮汗顔の至りである。

神奈川県転任の御挨拶を差し上げたのに対しても、祝詞と激励の御手紙を実に美しい御筆跡で頂き、愈々感銘したのであった。普通誰でも此の種の挨拶には返事や祝詞を送る者は極めて少ないのであるのに。これからは自分も受けた手紙には必ず返事を出すこととしたのである。

昭和五年八月より六カ月余、肋膜炎で病臥した時のことである。当時は三カ月以上欠勤すれば退職するのを常例としていたが、校長先生は農林省技師原田兵衛様（蚕一）や蚕業課長明石弘様等と御協議の上、態々神奈川県蚕業試験場へ御出下され、場長福田衷治様に御話して、当時としては特別扱いの休職と言う事にして、首をつないで置いて貰ったのである。其の時わざわざ病床も御訪ね下され慰めや教訓を垂れられて、「病氣とは氣を病むと書くよ」

と言われたのに対し、少々抵抗を感じたのであったが、後になつてつくづくあの時に応わしい御言葉だったと思つた。尙御帰りの際東京の栗まんぢゅうの折箱を、試験場の小使に届けさせて頂いた時には、其の御温情に感涙し病床をぬらした事であつた。

昭和八年暮病氣が再發した時には、病も重く度々助命を願う事は却つて心苦しいから、此の際退職する決心であることを原田様に申上げた所、校長先生は其れを御聞きになつて、是れはまた懇々と職場の事、療養の事等今後永年の活動の爲、ひとまず退職して完全回復をはかり、将来の基礎を固めよとの御手紙を頂き、どこ迄御心にとめて下さつて居るのかと、感泣した次第であつた。

昭和十二年二月先生の御病氣見舞の手紙を差し上げたのに対しても、御病氣全快の由に併せて「君は病後なれば加養專一にせよ」と申して來られた。

昭和十二年夏高知県蚕種共同施設組合に就職の際も、病氣の事を御心配下され、健康を完全に回復する事を第一義として、勤務に精勵せよとの御手紙であつた。

此のように何時も病身の自分に対するいつくしみと、励ましと共に、健康回復のことをのみ御心に止められ、御教訓を頂いたのである。

昭和十五年六月長野県蚕業試験場飯田支場長に任ぜられてから、一度松本の浅間温泉で同窓等と共に会ひした時、いただいた色紙に「和光同塵」とあつた。其の時にも此の訳を聞かされたのであつたが、是は老子の言葉で非常に深遠の意味があるようである

が、孤獨獨善を戒める言葉で、場長としての立場を教えられたものと思う。全く先生の御生活はこの字句其のものであつた。今も丸い色紙かけに入れて飾つてある。今一つの短冊には、自分の過去の苦難を思われてか「青年熱汗当拭老後」と書いて下された。先生の御手紙にはいつも長太郎とあるのである。全く身の縮まる思いがする。また御年賀にはいつも一言励ましか教訓が書いてあるので、受取つてしばらくは其の筆跡と共に見入るのであつたが、自分もどうかして之を見習いたいと努めるようになった。

此のように自分の傍にはいつも先生が付き添うて居て、私生活から公務に至るまで見守り、かばい、手を引いて励まし、鍊成して頂いたからこそ、鈍根醜惡な自分が何とか今日あるを得たのであると思う。どちらから考えても自分程先生に御迷惑をかけ、御世話になつた者はあるまい。其の温容は終生自分の目に焼きつき、御教訓は心底深く滲み込んで消えることはない。御書の数々は大切に子々孫々に伝えて家宝とし度いと思つて居る。

(元長野県蚕業試験場飯田支場長)

一夜の宿を賜わつての慈父の愛

(大、一、蚕) 原 田 種 亀

嗚呼、針塚校長先生、私は大正の中期頃学生としてお世話になつた者であります。

東京の中学校を卒業し当時の受験雑誌の学校紹介の中から、若

い校長先生の肖像と学校紹介の記事を発見し、只何となく憧れを感じて都塵を後に上田へ進学を決心をしました。始めて上田の地を踏んだとき文字通り山紫水明の地、潑刺とした校長始め諸先生の風姿に接して、頗る満足感を覚えしました。在学当時及び其の後針塚校長への追想を思い出すままに記録して見ましょう。

剣道と針塚校長 入学後間もなく新入生歓迎の各部の校内大会が開催されました。私は中学時代剣道部の選手をしたこともあり、剣道部の紅白試合に出場しました。当時一緒に出場した剣士には上田出身の逸材小宮山太助(糸八)・小兵乍ら技巧派の後藤仙弥(蚕九)・気合の激しい九州男児津留稔(糸八)・温厚な西孝重(糸八)の諸氏が思い出されます。師範早野清三郎先生の審判で、初めての他流試合ですから緊張感を覚えました。当日校長・和田仙太郎部長・佐藤利一・原田親雄諸先生が臨席されて居り、校長先生の面前で雌雄を決するなど思いもよらないことでした。松本高校との定期戦・寒稽古等は今尚深い思い出があります。

寒稽古 当時の寒稽古は現在のものに比べると可成り猛烈なものでありました。極寒の折早朝五時から毎日向う三週間中々やり甲斐がありました。針塚校長は毎朝松尾町のお宅から斯道奨励のためステッキの真中を握って悠々と来場された姿が思い出されます。又和田仙太郎部長は鷹匠町のお宅から毎朝四時過ぎには来て居られました。学生唐木田藤五郎氏(糸六)は和田先生と先陣争いをして居ったとか、とても遅刻など出来ませんでした。当時の先生方の垂範は実に壮たるものがあり、頭の下がる思いであり

ました。寒稽古を終った或る日、剣道部長の紹介で松尾町の針塚校長のお宅を訪問したことがあります。奥の間へ案内され、しばらくすると先生がお見えになりました。私に窮屈さを感じさせない様にか、世間話を淡々と進められ、結局話題は剣道と刀剣のお話で終始しました。其の間時々茶菓を進められ「君よかったらいくらでも食べ給え、東寮の学生は随分菓子を喰う相だな」など云われました。辞する時は玄關まで見送り下さって「又よかったら遊びに来給え」と、誠に有り難い気がしました。其の後も二、三回お邪魔しましたが、学生訓をまじえてのお話、奥様も同席されたことがありましたが、映画のお話なども伺い少しも窮屈さは感じることがありませんでした。和田仙太郎部長のお宅にも屢々伺いました。ここでは終始剣道のお話だった。松高との定期戦が近づくといつも家に来てと申され、「選手の中には今度の試合には勝ちたいなど云う者があるが平素の努力精進なしには勝利の栄冠は得られない。勝敗は時の運など絶対に有り得ない。勝利の陰には必ずよって来たる処あり」と諭されました。松本へ遠征のときには駅頭に於て勝栗を下さって激励されました。ある時勝利の吉報を打電しましたが、帰校の時間をお知らせしなかったため、和田先生には汽車が着く度に駅まで出迎えられた由、洵に恐縮の限りでありました。幸いなるかな在学中松高には一度も敗れたことなく、いささか面目を保つことが出来ましたが、これは陰に陽に針塚校長・和田部長のお力の賜物で、其の御恩は今尚肝に銘じて居ります。

慈父のお言葉

或る日の養蚕実習中の出来ごとですが、桑摘みに桑園に行った時、桑園の一隅にイチゴが熟しているのを発見し、誰言うともなく摘桑籠を投げ出し、二、三名どっかと腰を下して試食をして居りましたところ、校長先生がひょっこり傍に佇んで居られるのを発見して、誰一人声を発する者もなく、只耳が熱くなるのを感じました。校長曰く「君達は摘むものが違うのではないか」と一言「はいそうであります」と、漸くして立ちあがり一礼して一目散に桑園に消えました。全く慈父にもまさる恩情の一言、赤面の至りでした。

ランニング

又天高いい秋の日、運動会も一週間後に迫り、科リレーに出場するため養蚕科の選手一同運動場でランニングの練習をして居りました。そこへ校長先生が見えられ「僕も当日は走らねばならない」と、先生は上衣を脱しズボンをたくり上げ素足で、意気揚々とロングで二週されました。其の意気の壮なる学生達は思はず拍手して、歓声をあげました。

秋霜烈日の訓辞

又或る時緊急に全学生を講堂に集められたことがあります。何事かと疑念を抱いて定刻に集合しました。この時ばかりはいつもと違い顔を紅潮させて壇上に立たれ、「近頃の学生は花柳の巷に出入する者が多いと聴く、実に嘆かわしい。学生には全く用のない処である。一家に便所がある如く社会には汚ない所もある。学生は今後すべからく汚ない所に近よるな、堅く言い渡す」と、実に秋霜烈日、在学中只一回の猛訓示であり一同身の引きしまる思いでありました。

水戸農学校時代 私には野砲兵第一聯隊を除隊して大正十三年一月水戸農学校に赴任しました。或る日人事のことで校長御自身来水されたことがあります。

其の時茨城県下の同窓生全員が水戸に集まり、先生の御慰勞を兼ねて歓迎の宴を張りました。若い者が大勢でお迎えしましたので殊の外お喜びでありました。翌日当時橋本広君(蚕六)と在職校にお出でになり、一通り校内を參觀されました。終ってから大洗海岸の料亭で鮮魚でも召し上がって戴くため、私共で御案内申上げました。車中で色々のお話の折、私は当時川釣・海釣に熱中して居り、ボラ釣の最盛期であり、出世魚の説明として「一〇糶位の大きさのものはオボコ、二〇糶になればイナ、四、五才になればボラ、其れが南下して九州地方で生長したものがトド(カラスミのとれるもの)と云う風に名が変わります。其れで出世魚として珍重されます」と申しますと、「おお其れは面白い、もう一度教えて呉れ、成る程トドのつまりとはそこから出たのだな、語源がわかった」と爆笑されました。こゝまではよかったが「君は魚釣りはこの辺で卒業して月給を釣ることを考えよ」と全く冷汗の思いでした。

お宅に泊めて頂いた一夜

昭和十年秋南信の諏訪蚕糸学校へ転任挨拶のため、久し振りに母校を訪問し校長先生にも拜眉の機を得ました。其の時「これからの日程は」と、お聞きになりますから「今日は長野泊まりをして、翌日試験場に寄り帰校する予定です」とお答えすると、「其れではどこに泊まるのも同じだ、僕の家

に来て泊まり給え、何にも遠慮はいらん」と申されました。甚だ恐縮に存じましたが遠慮申上げるのも却って失礼かと思ひ「其れではお邪魔させて戴きます。一寸農場の倉沢教授の処へお寄りしてから参ります」と辞去しました。しばらくすると校長先生が桑園部の事務室迄お出でになり、「用が済んだら一緒に行こう」と言われました。倉沢先生は助け船を出されて「若い者は呑気にしたいので先生お構いは要りません」と、口添えして下さいましたが「別に窮屈な思いはさせない、行こう」と言われたので随行致しました。新参町のお宅に着くと玄関で「お客さんを伴れて来た。今夜泊めるから仕度をせよ」と申されます。全く恐縮の思いでした。御一家と一緒にお食事をしてから、離れ座敷に通され「これが君の室だ、ゆっくり休み給え」と申され、しばらくして又お出でになり「君は活動（映画）が好きか」「嫌いではありません」「そうか、でも今夜君に刀剣を見せよう。二階に来給え」と言われました。実の処この方が結構でした。そして算司から一振り一振り持ち出され、砥の粉を叩き拭っては一々解説して見せて下さいました。数二、三十振りに及び、其れから寝につきました。以上の様な次第で全く慈父の感じでした。学生として又一社会人としても偉大なる校長先生であつたと追想致します。私は初めて父母の膝下を離れての上田生活でしたが、諸恩師先生方の慈愛に満ちた御薫陶により、私の人生殊に教育面に於ける信念の確立に対しては決定的の方向を与えて下さったことを今更痛感し、特に針塚校長先生の御懇情は終生忘れ得ぬものがあり、往時を回顧しべ

ンをとった次第であります。

（元福島県大槻農業高校長）

忍の教訓

（大、一一、蚕） 勝 又 藤 夫

針塚先生の追想録には多くの人が執筆されると思ひ、私などが書くのは実におこがましいとも考える。只私は蚕糸業人として多少経路を異にしたと思ひ、この追想を綴ることにした。

忍の教訓 伊藤仁斉の言「一忍七情皆中和、再忍五福皆斷

臻」を先生が強く教えられ、千曲会館に長く掲げてあったから、恐らく卒業生の大部分が知るところと思う。私の感想は一生の終着駅へついた自分が、驕って見て忍耐が必要であつたと云うのではない。私は数年来東南アジアの蚕業開発に従事し、近く第四回目の南方向け出発を予定しておるが、此の南方開発に従事した者は誰でも、「出発から帰国迄忍耐せねばならぬ」と感じることである。私は一九五七年四月故唐沢正平さん（蚕二）から役務賠償要員の一人としてビルマ行きを指名され、日本での戦場を退いてその年八月契約調印し、九月末渡緬した。その間の生活は忍耐そのものであつた。今でも忘れられないのは外国生活をしたことのない私が、ビルマでの一月の生活費一、〇〇〇チャットを大蔵大臣宛に申請し、その認可を得る時のことである。此の事務は日本銀行の一係員が扱って居った。一、〇〇〇チャットは日本円で七五

六〇〇円である。日本銀行では係員が僅か七万円余りで生活出来るか否か保証人を出せとのことであった。私は全く途方に暮れた。幸いに外務省賠償部に坂本事務官が居り、過去三年ビルマで領事をして居ったとのことで、坂本氏から一、〇〇〇チャットで充分だと説明され、その旨を携えて再び日本銀行へ行き、漸く認可を得て、旅券も受けられたが、日本銀行の係員の不親切な態度には今でも耐えられない想いがする。

ビルマで生活する間も異国人を相手とする仕事で、国民感情の相違は耐え忍ぶか諦めるか外に途はない。尚又私はヴェトナム広南省大録郡で養蚕家に対し、始めて日本種の飼育を指導したことがある。養蚕家は自ら五十一年の経験があると私の言に従わない。私の調査でヴェトナム在来種は、一生の間に雌一頭で桑葉四・七瓦、雄一頭四瓦を食べるが、日本種は雌一頭一七瓦、雄一頭一五・二瓦も食べるから、日本種には充分給桑せねば良い結果は得られないと云っても、彼等は給桑量を少なくして遂に不作した。此の場合も国民感情の相違で私の云うことが了解されないのである。忍耐と寛容で将来諒解する迄指導せねばならぬと思っている。

ビルマ行の際には出発迄に半年も待機させられ、その上で旅券交付等について忍耐を教えられたが、先方でも殆ど諦めるところ迄に苦勞した。忍の教への貴重さを知った次第であった。

静観自得 これは針塚先生が私の性急なところを見抜いて書いて下さった横額である。毎日読んでいます。静観自得を見ていると「あわてないで適期を捕えよ」と教えている様である。一九六〇

年ヴェトナムで色々調査の末、熱帯の平坦地でも養蚕が盛んであるが、在来種は僅か五%の生糸量歩合しかない。併し日本種は飼育出来ない。ヴェトナムと日本の交雑種なら糸歩一〇%以上となり、平坦地でも飼育出来るとの結論となり、色々試験したが養蚕の盛んな平坦地では、一方の親の日本種が飼育出来ぬのみでなく、微粒子病も多くて蚕種製造は不可能なりと云うことになった。そこで海拔一、〇〇〇米のプラオ高原で開墾地の農家を借りて試みた所、実に好成績であり、ヴェトナム・日本の交雑種も出来て、之れを平坦地の既往の養蚕家に配付した所好成績を得た。此の実績から私はヴェトナム政府に対してプラオに養蚕所を設置することを勧告し、関係局長もその他の役人も大賛成したが予算がなく中々設立出来なかった。静観して時機を待った所、一九六一年五月にはプラオ養蚕所が出来て、副大統領出席の上開所式を挙げたとの報告を受けた。ヴェトナム政府の希望で農林省蚕糸試験場から頂いた日本種の桑苗も見本園へ植えることが出来た。「静観自得」のよい例であった。

幅の広い変化に富んだ教え 針塚先生の教えを振り返って見ると、「技術者として教育してやるが一律の型にはまった技術者でなく、それぞれの立場に従って育って行け、誰も彼も一律の優等生である必要はない」と云って居られた。

先生は大正八年絹糸紡績科を新設して「日本は原料生産に甘んじていてはならぬ。絹の加工は之れを日本で行え」と進歩的の意見を公表して居られる。世の変遷によって絹の消費額には往年の

隆盛は見られないが、その優美性では纖維界の王者として愛好者は絶えない。現状では結局供給不足である。一方日本では工業国移行に伴い生糸の原料生産額は減退の趨勢にある。今頃先生は多分「自然の勢だ、生糸の生産は漸次農業国へ移し、日本は絹の加工国として発展せよ」と説いて居られると思う。

然しそれには吾々が国際人としての覚悟を持たねばならぬし、意見の発表も国際的に公表出来る態勢でなければならぬ。国際的になる蚕糸業に従事するには国内に働く人も、国際的に働く人も、それぞれの立場に従って、変化があり幅の広い活動をしなければならぬ。

進歩的であつた針塚先生は蚕糸業もこれに携わる蚕糸人も、時勢に従って変わって行くべきだと教えて居たことを想い出す。それにしても針塚先生のお教えは、時勢の進運に従って、常に新しい意義と生命を加えてわれわれを導いて下さることに限りない感謝を捧げる。(元長野県蚕業試験場病理部長 農学博士)

昇格運動の頃など

(大、一一、紡) 井上彰久

おぼろげに思い出すと、素朴な、何か役人の住む住宅町といった感じの、あの上田特有の家並の中に、針塚校長先生のお家があった。ある晩数人で訪問したことを覚えている。その時のメンバーは山本岩三郎氏(蚕七)は覚えているがその中には多分鍵谷伝

氏(蚕七)故可児良夫氏(蚕七)なども居た様だがハッキリしない、何しろ四十二年も昔のことだから。

僕が絹紡第一回生として入学したのが大正八年で、その年の早いうちだったと思う。その頃新聞では学制改革で単科大学が出来ることとなり、一ツ橋の東京高商や蔵前の東京高工始め有力な専門学校では、大学昇格運動が盛んに行なわれている事を報じていたが、僕が入学してみると学校内にはそんな空気は全然なくがっかりしたものだ。希望を抱いて入学したのだが静かな高原の町の平和な学校だった上に、そんなことだったから平凡と淋しさを感じたのであろう。まだ新入のホヤホヤだったが講義が一緒だった製糸一年の故酒井利夫君(糸九)や養蚕一年の安仲勲君(蚕九)等と話し合つて「一ツ昇格運動をやろうじゃないか」、「よからう」、「やろう」と云うことになり、先ず先輩の上級生に話しかけることに決め、三年生に話を持ちこんだところ、先輩は至極消極的で話が煮え切らないのに業を煮やして、よしそんなら一年の我々だけでやろうじゃないかということで、いざ集会を開こうと云う段になったら、初めて上級生も腹を決めて参加して来たので、直ちに学生大会を開くことが出来たのだった。

我々の意気は旺んだつた。大学に昇格が決まっても我々がすぐに大学生になるわけではないが、自校が自分等の在学中に単科大学に昇格決定になるということと、その運動に手をつけたということは痛快ではないか。賄征伐などで若いエネルギーを発散するよりは少々スケールが大きいのだ。それに入学して聞かされた

上田蚕専が、歴史・施設から見て我が国蚕糸の最高学府に恥じないとするなら、単科大学に昇格は他に率先するのが当然ではないか、という大義名分を、若い血が感じていたのである。

やっと腰をあげた上級生と共に教授を説き廻るやら、内外のP・Rに忙しかったが、やっているとうちにあんなに初め平凡だった上田の空気も、一たび昇格運動の火がつくと、その勢は燎原の火の様にえ広がって状態は一変した。この運動は単に学校丈けの問題でなく、地元上田の問題であり、長野県の問題であると共に、蚕糸界の問題として発展すべき要素を多分に含んでいたからである。だが初めの頃は決して生やさしいものではなかった。化学の川瀬教授の様に積極的に支援してくれた教授もある反面、色々と骨の折れたものである。丁度そんな頃の或る晩針塚校長をお宅に訪問したのであった。

初めに我々からこの運動の主旨を説明して先生の諒解と協力を得ることに努めたのであるが、先生は終始我々の話をジッと聞いておられ、最後に言われた言葉は簡單明瞭だった。それは「君等は大学昇格運動なんかしない方がよい、大学にはいりたいものは初めから大学へ行けばよいのだ」と言うのだ。僕は校長の考え方と腹が分った様な気がした。そして現在のこの運動のためには全然頼りにならないものと判断した。それにもかゝらず、この運動はその後も強く推し進められたし校長も亦色々と努力されたこと、と思う。運動は周知の通り「専攻科設置」ということでけり、少額ながらその予算も交付された。これは三つの蚕糸学

校中わが上田だけであった。後で聞いたことだが、その当時既に針塚校長は単科大学案を文部省に提出して、強くその認可を要求して居たとのこと。学生がこの運動に巻き込まれることを、警戒なさっていたのだっただろう。

上田には三年間在学したのでから、思い出も多い様な気がするけれども、多くのことは忘れて了っている。針塚先生についても一つ未だに忘れ得ぬものがある。それは卒業の時に先生から箴言を書けと言われ、何か氣にいった格言を書けという事であったと思うが、考えた上で書いた内容は今ははっきり覚えていない。先生が人間として偉い人だということは、三年間に充分感得している。卒業後も自分の一生を通じて先生に誓い且つご指導を頂きたいと思い、自分として最も注意すべき点だと考えて「好きであるけれども自分には向かないと思うので政治家には転向しない決心をしました。よろしく御指導を願います」という意味の内容だった。

卒業以来学校で教育を受けた絹糸紡績は絹紡会社に三年勤務、絹業に従事五年で他業に転向したのでから、この点申訳ないと思っているが、幅広い人間生活で針塚先生は私の内に箴言を通じて存在され、常によき心の師として仰ぎ、先生を忘れることはない。大分前に先生に揮毫をして頂いた軸も長い時間と変遷のため今発見出来ないけれども、箴言を通じて先生は何時でも想起出来るし、倫理を講ぜられた教壇上の謹厳でしかも莞爾とされたお姿が印象的に浮かんでくるのである。

(第一生命保険相互KK参事横浜支部長)

時代に先行した建学方針

(大、二三、紡) 野口新太郎

針塚先生は人格の高い大教育者であったことについては、多くの人びとが書いていると思うので、私は先生に対する別の思いを書いてみたいと思います。

母校の出来たのは明治四十三年です。その時分のわが国は、日清日露の戦に勝って、いよいよ世界の一等国に列したので、国内の諸態勢も早く一等国らしく整えたいときです。当時生糸は輸出の大宗で、蚕糸業は国の経済を支える産業ですから、これを振興させて国の経済を向上させたい、それにはまず蚕糸に関する直轄学校をつくってその改良を図る、これが母校創立の事情であり、また母校に対する国家の期待であったと思います。

後の時代に母校とともに国立蚕糸三校といって、たがいに競い合った東京・京都の二校も、また当時は農商務省蚕業講習所といって学校ではなかったので、蚕糸の国立学校といっても他に例がありません。それでどんな学校をつくるべきか、そしてその中にはどんな科を置くのか、講座はどうする、それらはみな校長に考えてもらえばよい。まあこんな事情だったと思います。

かくて針塚先生は初代校長として、日本で初めての蚕糸専門学校をつくられたのです。先生はどんな構想で母校をつくられたの

か、私は先生に伺ったわけではないが、開校後の母校のあり方からみて、それは日進月歩の斯業の速いさきまで見通した、素晴らしい構想であったと思います。

開校当初養蚕・製糸の二科をもって発足したことは当然でしょうが、しかし先生は当時すでに紡績および人造繊維の将来を見通して、紡績教室(これを機械工学教室と呼んだ)と、人造絹糸教室(これを工業化学教室と呼んだ)をその中に組み入れ、なおその実習工場(人絹工場はすこし遅れて出来た)まで完備したのであります。そしてこれらは他日機会到ればそれぞれ科に独立させるための芽株とされ、なお将来は繊維に関する総合学府にまで発展させたい、これが先生の蚕糸専門学校建学に対する構想だったと推察されます。まことに素晴らしい大構想です。そして先生はこの計画を着々実現に移されたのであります。

すなわち大正八年には、わが国の国立学校に劃期的な大拡張が行われました。そして先生はこの時かねての計画であった紡績教室を独立させて、絹糸紡績科をつくられました。既にこの時には、東京・京都の蚕業講習所も文部省に移管されてひとしく養蚕・製糸の二科から成る高等蚕糸学校となっていました。この時東京には栽桑科が、京都には蚕種科が出来ました。このようにして同様の三蚕糸学校も、漸次そのカラーを異にして、東京・京都の両校は農学一色の進みかたを示し、上田は次第に工業色彩を加えてきました。さらに昭和十五年井上校長の時代にいたって、さきの工業化学教室が繊維化学科に独立され、こゝに針塚先生の建学第

一期構想はほぼ完成されるにいたりました。

しかし一つの学校を造って、それを軌道に乗せるまでには、如何ばかりの苦勞が払われるものか、校長の苦勞、全職員之苦勞は、なみ大抵のものでなかったと思います。私は上田蚕糸絹糸紡績科二回生として先生のご薫陶を仰ぎ、昭和五年にまた母校に戻って母校教官の末席をけがし、以来再び先生のご指導を頂くことになりました。

私が戻った当時の母校は、開校後の第一發展期を経て、紡績科新設に伴う第二發展期を迎えた時でありました。發展とは外殼を破って膨脹することでありますから、發展期はすなわち困難期であります。既に母校は蚕糸や絹業界においては、押しも押されもない斯界の最高学府として通っていました。紡績界では絹糸紡績界を措いては、母校の紡績科を殆ど知りません。しかし毎年の卒業生を、絹紡会社ばかりに就職させるわけにも行きませんので、是非就職運動が必要になるわけであります。これは母校に限らずどここの学校でもやったことですが、まだ地盤のない母校紡績科には格別必要な処置であります。そして母校ではこの仕事を卒業生人事と呼んで、大休同窓出身の教官がこれを担当していました。

ある日私は校長室に呼ばれて、針塚先生から、卒業生の人事は長く学校にとまらるべき若い教官が担当するのがよいこと、そしてこれは熱情をもってやらなくては、成果があがらないこと、などきかされたうえ、これから紡績科の卒業生人事をやってくれないかと申し渡されました。当時私も、これに関する同窓の苦勞を

知っていたし、この隘路を開拓しなくては同窓の發展も望まれないことを痛感しておりましたので、大いにファイトを燃やして、先生の申しつけをお受けしたことでありました。そこで私は勇んで、この仕事に取組んだのですが、また殆ど暖簾のきかない上田紡績科のかなしき、それに私の若輩かつ無才の故もあって、なかなか成果がありません。これにはこんな思いもあります。

ある大紡績へ行ったとき、上田は絹の学校ではないか、うちでは絹はやっていないとて、とりつくしもない思いをしたことや、またある会社ではあなたの学校はなかなか野球が強い、昨年甲子園では優勝を逸して惜しかった、など母校を諏訪蚕糸(現岡谷高工)と混同視されて、くやしい思いをしたこともありました。当時の就職運動には、このような笑えない苦心談が沢山あります。

しかしこのような苦心も、やがては報いられて、その昔母校と諏訪蚕糸と混同した会社にも、今は同窓が重役として頑張っているし、また「当社では絹に用はない」といって、素気なく応待した会社の技師長も課長も、今は同窓が占めています。かくて斯界にも母校出身者多士済済、今や何処へ行っても名門上田紡績として迎えられるにいたったのであります。まことに今昔の感に堪えません。

母校では昨年の創立五十年を記念して、学部機構の大改革を計画し、既に着々實現の歩を進めています。これは母校の機構を、科学の發展に伴い急變遷する近代産業のあり方とマッチさせ、更に一段とその發展に貢献しようとするものでありまして、これは

その昔母校創立に際する、針塚先生の、常に時代の一步さきを行く建学方針と、全く精神を一にするものでありまして、私はこのたびの母校機構改革を思うにつけ、先生のご炯眼に對しいよいよ畏敬の念を深くする次第であります。

(信州大学繊維学部教授)

伊香保の一夜

(大、二、紡) 巢山喜吉

先生が故郷群馬県で亡くなられてからも何年になるかな。先生はどんな御仁であったか、人それぞれの観察でいろんな面が画かれるであろうが、私の印象に残る先生は、あの美しい姿と云うか凜凜しいお姿である。大正の戦争前のこと金ピカ服をお召しになり、編笠の様な金ピカ帽をお冠りになったお姿である。或は又黒いガウンを召した重厚なお姿である。書を良くされた、刀剣を觀賞された、そんな先生も知ってはいるが、それは只それだけである。しかし針塚先生の私の心に一番生きているのは、私の伊香保遊記の思い出である。これを語るには一寸時間がある。戦争中繊維がなくなつて濠州羊毛も日本に來なくなり、生糸で毛糸代用をすることになった。先輩の岡部弥平さん(糸三)が網状糸を發明されたのは、そんなことに刺戟されてのことだろうか。よしそれをやつてやろうと決めて、物好きの私が三菱の仕事にこれを取入れ、惠郡山の下の岩村町でそれを始めた。丸八製糸組合の工場

である。そこにその機械をとりつけてやり始めたのである。今和興紡績と云うスフ紡績の大工場が大垣にあり、その社長が池田文夫君であるが、当時私が三菱化成の岐阜工場長で彼は工務部長であった。網状糸と云うのはエンドレスの生糸を振動しながら枠に巻き、その枠の一端から管状になった繊維を側面に引き出す、そうすると丁度毛糸の様にふくらとした生糸が生まれて来る、こんな要領のものであった。これで洋服糸をつくつたり、毛糸の代用をさせるのであった。そんなことで私達は戦争中に前橋に出かけて、岡部さんに逢わねばならぬ用事があった。私と前記の池田君とで岡部さんに逢つていろいろ話し合つていううちに、針塚先生の話が出た。近くだから行つて見ましようやという岡部さんの話に乗つて、吾々三人は先生のお宅を訪ねた。先生は和服を召してくつろいだ恰好で玄關の私達をお迎え下さつた。応接間で一寸挨拶して池田君を紹介したりした。こゝでは仕方ない伊香保に行くことではないかと、先生が申された。それではお伴しましようということになつて、伊香保の宿まで随分の坂路であるが、案内役が先生であるからでもあらうが、元氣で一番先に立つて案内して下さつた。私の故郷は熊本の菊地郡である。菊地武時の居城のあったあそこである。先生は歴史に大麥詳しく、かえつて先生から菊地氏の話を聞いた。湯には先生と二人で這入つて、私が先生の背中を流してあげた。「お前も洗つてやろう」と、それには恐れ入つたが勿論御辞退した。先生には家庭の事など何にもお話にならなかつたが、お前達のクラスの〇〇はどうしとる、何回の誰はどこ

に居るか等、いろいろお聞きになった。之等の人々は余り上等な人物とは思われない方々であった。御老体なのによくも覚えておられるなど感心した。所が私達の学生時代のこととはあまり知っておられない。否無視しておいでになるのである。こゝが私が先生を語る壺である。外のことはどうでもいゝ。先生のおっしゃるのには、先生に無視(?)されたものは却って立派な卒業生である。親がかたわの子を人一倍に心配するように、先生の覚えておいでになるそんな人達は、先生の心の中にあればどうだろうと心配をされる人達のようにあった。私は無視された様なことでよかったと思った。親身の教育者であった証左だ。こゝに私は先生の片鱗を感じたのである。有り難い先生であったと思う。こんな人格が上田の卒業生には先生の影響をうけて伏在していると信ずる。そしてこれは、上田の卒業生の只一つのとりえだと思ふ。いや他にとりえはないとはいわぬが、この点が上田の卒業生みんなの特徴だと思ふ。私の伊香保遊記四名の中先生と岡部先輩はもうこの世におられない。こゝに先生の思い出をかいた。この身が先生や岡部先輩の後を追うのも間近いであらう還暦男の一筆である。

(世紀紡績KK社長)

不世出の名校長か

(大、一三、紡) 香山清和

僕は生徒として先生に御世話になった上に、教職員として母校

に勤めたので、先生とは相当深い関係がある。にも拘らず愈々筆を執って見ると、書くことがさっぱりない。この原因は先生が逝去されてから相当長い期間が経っているので忘れてしまったことにもよるが、深く考えて見ると、先生と趣味の上の交際がなかったことによると思う。先生の御趣味は高尚でやや古典的であったのに対し、僕の趣味は下品で新しがりやであったので、一つも一致したものがなかったせいであらう。

先生の御趣味として先ず第一に挙げられるものは書道である。先生は漢詩をよくされ達筆を振るわれた。始めの先生の書は素人の僕にもあまりうまいとは思えなかったが、依頼の多かったせいもあって、非常に努力され、晩年には実に見事なものとなった。当時の卒業生、特に母校にいたもので、先生の書のいくつかを頂かない者はなかった。そんな状態であったので、先生は書の約束を果たすのに寧日なく、校長室(旧本館階下東端にあった)に居られる先生は、何時伺っても来客のない時は字を書いておられた。先生の書に関連し名書名筆を持つ事が流行し、書鑑定の大家和田先生の斡旋により、書を手に入れる人が相当あった。然し僕は字が下手であったので、下手は嫌いに通じ、字に興味を持たず、軸は極彩色絹本の密画に限ると放言して、字の軸など集めようとしなかった。従って針塚先生に書いて貰わず、和田先生にも依頼しなかった。この針塚先生に書いて貰わなかったのは石倉先生の説に引張られた点も多少あるようである。絵の軸がよいと云いながら、絵を買った訳でなく、本当は生活に追われていたためである。そ

れ故僕の手許には先生の書は一つもない。今頃になって頂いて置けばよかったと後悔している。

次に先生の御趣味として挙げられるものは謡曲である。これは御夫婦共にやられた。先生が無理に勧めた訳でもあるまいが（僕は一度も勧められなかった。尤も石倉先生には勧められた覚えがある）、母校に勤めている者で謡曲の仲間に入らない者は稀であった。僕はその稀の一人で到頭入らないで終った。これは謡曲のような、かたいものが好かなかったにもよるが、大体紡織科職員の入入は少なく紡織科長だった岡先生の加わらないのに多少影響されていたかも知れない。

先生の御趣味は更に刀剣がある。刀剣については母校では大滝先生のような専門家もあり、又和田先生も相当の鑑識眼があつてなかなか盛んであつた。こうした中で僕は刀にも何等の関心がなかった。大体僕は古い物が嫌いであつた。又こうした骨董いぢりをする懷^{なつこ}や心の余裕がなかったのかも知れない。或は多少へそ曲りであつたかも知れない。

又先生は山登りも好きであられた。然し僕は一度もお伴したことはなかった。先生は植物を好かれ、これも大きな御趣味であつたようだ。それ故学校は校舎が見えない位樹木が鬱蒼と繁茂していた。文部省のお役人が樹木が多過ぎると云つたとか云わないとか又聞きしている。終戦直前小泉蚕業校が爆撃されたのに母校が無事だったのは樹木のせいだと言う人があるがまさか？僕は人工品に興味を持ち自然物に興味がなかったの之の方面にも平行

線であつた。

x

x

先生とは趣味上の交渉がなかったのでお宅へお伺いするのも年に一度の年賀位であつた。従つて先生に直接関係した秘話は少ない上に、時期が経っているので思い出せない。それでも忘れないでいることを二、三書いて見よう。

学生時代に先生に叱られたことを覚えてゐる。何年生の時か忘れたが、修身の授業（三科合併）の始業の起立の時、僕は立たなかった。別に反抗した訳でなく物ぐさのせいであつたろう。これを先生が見付け出し名前を云えと云われたが、もう皆着席しはつきりしないままとぼけてしまい、先生もそれ以上追求しなかった。後で男らしく堂々と名乗ればよかったと思つたことである。この辺に先生の礼儀正しい一面が伺われた。

次に先生にお詫びに行つた話がある。こう書くとい僕の先生との関係は悪い事ばかりであるように見える。僕が母校に勤めるようになってからのことである。紡織科生徒の見学旅行引率者は何時も目崎先生と決まっていた。それを一度だけ僕が引率して行つた。旅程の終つた夜、生徒にダンスホールを見学させた。それを内田先生に嘆き出され、大滝先生から校長に「引率教官は厳選を要する」と告げ口され、岡先生の勧めで校長の処へあやまりに行った。さぞかし大目玉を喰うだろうと覚悟していたら、「態々来て呉れなくもよかったのに」と云われただけで、あつけない位であつた。これは先生に話が筒抜けであることと御寛大である事を示し

たものである。

又先生は人の嫌がる事を進んで引受けられる御性格を示す次のような話がある。当時学校には軍事教練の野外演習と云うものがあり、それで何処かに泊まった時、竹下文英さんと云う軒の大家がいて、誰も同じ蚊張で寝る者が無い。すると先生が「僕が寝よう、よく眠るたちだから軒など苦にならん」と買って出られた。夜半の二時頃になって先生が僕の蚊張の処へ来られ「あんな酷い軒とは思わなかった。とても眠られん。君の蚊張へ入れて呉れ」と云われ、同じ蚊張に寝る光榮に誰かと一緒に浴した訳である。

僕が学校を辞めて満州へ就職して間も無く、同級浜香三君（紡三）の事件が起こった。この時無謀にも先生に弁護して頂こうと大それた計画を立ててお願いしたのである。この頃は先生は既に校長を井上先生に譲られていたが、言下に快諾され違い満州の新京（今の長春）まで来られたのである。その時、在満卒業生有志が先生を囲んで奉天（現在の瀋陽）で撮影した写真は現在なお所持している。先生の熱涙溢るる弁護は浜君のために大いに役立った。この時には別に石倉先生にも御足労を煩わした。これは針塚先生が卒業生のために自分の身で出来る事なら、どんな事でも引受けて下さる御真情を示したものと云えるであらう。

x

x

先生は日本でも珍しい位、非常に若くして校長になられたのであるが、先生程、校長として或はそれ以外の長としての資質を百％具備された人はなかったと思う。僕は幾人かの専門学校校長に接

し、所謂名校長の誉れ高い人にも会ったが、特徴と同時に欠点・嫌味・臭味紛々たるものも見られた。然るに針塚先生は校長として、また人間としてよい処ばかりで欠点がどうしても発見出来なかった。或はこの欠点のないのが欠点であったかも知れない。

先ず先生は風采から見ても非常な美男子であられ、若い頃は美髯をピンと張っていられた様だが、晩年には短くされた。黙って座っていられる丈で既に立派な校長であった。歩き振りの一つの特徴があった。手を左右に開いて伸ばしたままで動かさず、足は外向に膝を曲げずに歩かれた。それが堂々辺りを払う如き美事さであった。又式等で一同着席した後から庶務課長の先導で入場される態度、式辞等を述べられる姿勢・態度・音声等その演出振りは千両役者以上で全く板について居り一分の隙もなかった。出張などをした後先生の処へ報告に行くと真先に「やあ、御苦労であった」と声をかけられ、それが先生の言葉であるとの誰から聞いたよりも本当に嬉しく感ずるのであった。又僕等の訳のわからない長つたらしい報告にも如何にも共鳴されたように大きくウンウンと合槌をうたれ、僕等もついい気になって余計なことまでしゃべってしまうのである。先生は実に聞き上手でもあった。

当時の校長の権限は現在の学部長などとは違いオールマイチであった。然し之を笠に着て押付けられると云う事はなかった。先生を政治家と云うのは当たらない。そうした嫌味はなかったが、文部省出身であるのでその方面の政治力は身につけて居られ、本省へは相当顔が効いていた様であった。部下に自分の意志を押売

りする事はないとは云え、部下の云うなりになったと云う訳ではなく、自分の意志は上手にチャンと通して居られた。即ち先生は政治家らしくない政治家であつた。これは政治力の外に人格の然らしめる処であつたかも知れない。尤も晩年はやゝ自分の意志は捨てられて、どうでもよいと云う処が見えないでもなかつた。

東京・京都に先がけて絹糸紡績科（現在の紡織学科）を作られたのも、先生の先見の明があつた事を示すものである。三校の内でも最も早く工業に脱皮したのは本校である事は今後とも忘れてはならない事である。

先生は又非常に公平であられたと思う。人の好き嫌いと言ふ事は全くなかつた。若しあつたら僕など真先に嫌われたであらう。

先生が群馬県出身であられた關係上阿形先生・石倉先生・早川先生・目崎先生等同県出身の先生が多少多かつたが、之も閥をつくらうと考へてそうされた訳ではない。石倉先生は工業系特に紡織科を校長が不公平に取り扱っていると云われ、僕も当時はそう思つた。僕等の学生時代には紡織科は養蚕の講義と実習までさせられたのに、養蚕科は紡織の講義も実習もやらないで済んでゐた。

これは当時の状況では先生にもどうしようもなかつたのであらう。

先生は又長い間に随分腹の据え兼ねた事もあつたであらうし、勝手な文句を並べる者もあつたであらうが、それに対して決して怒られたり、文句を云われることはなかつた。僕のような人間でも在職中一度も叱られたことはなかつた。

先生は無欲で私利私欲を全然考へられない様であつた。従つて

在職中その積りになられればもつと榮進の道があり榮転の話も二三出たらしいが、そんな事には目もくれず終始一貫一生涯を本校で過ごされた。又退職される際も勲一等に叙せられた時、退職の意を洩らされ我々の留任運動により一応諷意されたかに見えたが、既にその時決心されていたらしく、約一年後誰にも秘密に手続を執られて辞任され、留任運動も全く効なく実に奇麗な幕切れであつた。退職せられた際の千曲時報（現在の千曲会報）昭和十三年四月二十七日発行は当時僕が編集兼発行人であり、その記事は僕が執筆したので現在も保管しているので、改めて開いて見て二十何年前を偲んだ事である。とにかく、先生のような人格・風采等が完備された名校長は今後絶対にこの世に出ないであらう。

（元満州纖維公社絹糸布課長）

ハイヤーの中の落し物

（大、二三、紡） 碓 氷 茂

祝電 蚕糸会館に勤務中のことである。

上京された針塚先生を中心に、上田の同窓生数名が雑談していると、たまたま朝鮮方面に勤務している同窓の一人が榮進した、という話が出た。すると針塚先生は、直ぐ財布から金を出されて、祝電を打ってくれといわれた。先生の同窓思いには感銘せざるをえなかつた。

お忘れもの これも蚕糸会館に勤務していた頃のことだった。

昭和七、八年頃だったと思う。針塚先生が僕に用事があるというので行つて見ると（多分野崎清さんの蚕種組合の部屋だったと思う）針塚先生がおられた。こっそり僕を呼んで「確氷君、君に頼みがあるのだが」といわれた。僕に頼みのあるなどということは珍しいことなので、どんな頼みかと、心を緊張させて、針塚先生のいい出されるのを待っていると、「実はね、今日文部省へ行った帰りに、ハイヤーを拾ったんだ。そのハイヤーの中に文部省で交渉するために持ってきた重要書類を置き忘れてしまったのさ。もともと文部省で説明をして来たので、もうそれほど大切ではないのだが。ハイヤーのことだから、運転手の住所も名前もわからない。探しようがないのさ。で、君すまんが、警視庁へ行つて、念のため遺失物係りで探して見てくれないかね。或はあの運転手かとどけておいてくれたかも知れないが、それで、若し見つかったら上田の学校あて送ってくれたまえ」といわれた。「ハイ、承知しました。警視庁へ行つて聞いて見ます」というと先生は、さらに語を継いで、「警視庁では、学校の庶務のものが、ハイヤーの中で置き忘れたのだといつてくれ給え」と、とくに庶務のものというところへ力を入れていわれた。校長といったのではまずいと思われたのだらう。翌日ただちに桜田門近くの警視庁に行き遺失物係りに面会を求めた。遺失物はすべて薄暗い地下室で扱っていた。来意を告げると係りのものは、名簿をくついていたが、ギッシリつめられた棚の間へ消えて行き、茶色の封筒を持って来て、先生の置き忘れた書類を渡してくれた。書物の内容は僕には必要も

なかったもので、はっきり記憶していないが、校舎増築か、機械の購入に關するものであったように思う。そしてその書類を上田の先生へ御送りすると、早速先生から礼状がとどいた。その上、車代とし若干の金も送られて来た。細かな事にまで気を配られる先生の御心情には本当に恐縮のほかなかった。

（海外協会理事）

針塚先生の満州旅行

（大、一三、糸） 青 木 友 弥

針塚先生は前後三回、満州に旅行された。その第一回は早く大正十三年夏で、つぎに昭和十一年であった。当時私は神戸に住んでおり、先生の帰朝歓迎会を料亭菊水で開催した事を覚えていて、席上先生は満州国の各分野で活躍している同窓の活動状況をいと満足げに話しておられた。第三回目は昭和十五年一月で、此の場合は前の御旅行とは趣が違い、心重いのがあったと推察されるのである。と云うのは、此の場合は問題を起こした同窓の特別弁護をする為、満州側同窓の要請で渡満されたもので、私は当時新京におり、色々御願いする立場にあったわけである。

それは昭和十四年八月頃であった。新聞の報ずるところによれば、日本に於ける帝国人緬事件にも匹敵する様な規模の事件が、満州国産業部を舞台に発生した。

當時はいわゆる非常時局下にあり、建国まもない満州国に於て

も、国家権力による統制経済が推進されていたが、産業部次長岸信介氏（前の総理大臣）の下で、主として纖維行政を担当し、生産と配給に亘る画期的な統制機構を完成して、実施に移した実力第一人者であった有能官吏の、同窓の一人が、此の問題に連坐し、渦中に巻き込まれたのである。

私共としては此の同窓を救済する方途如何が重大問題であったが、対処するよい方法が判らない。せめてものことに各地在住の同窓にお願いした数多くの歎願書を提出しても見た。そのうち公判は新年早々には行なわれる形勢にあり、早急に何とか手を打たねばならなかった。たまたま年も押しせまってから、鐘ヶ淵紡績会社（在勤の故唐沢正平氏（蚕二）が柞蚕事情調査のため来満されたので、事情を話して何とかよい手段がないものかと相談して見た氏も熟慮の結果、非常にむずかしいが御老体の針塚先生に御願いするより外あるまい。新年早々先生に頼みに行くから、満州側で旅費を工面して置けと言ひ残されて内地に帰られた。

私は此の旅費には日綿実業を退職した際貰った退職金を長野県信州新町の塩入信治氏に預けておいたものを引き当てることにし、唐沢さんとの打合せで、十五年正月二日、篠ノ井駅で授受する様に手配したが、連絡がウマく行かず、三日に滋野の御宅に御届けしたとの通知を受取った。

然し果たして先生が満州行を引き受けて下さるかどうか心配だったが、快く御承諾下さったとの通知を受取った時は全く夢の様であった。（唐沢さんは、先生に御願ひした模様を追想録に書く

つもりだと奥さんに話しておられたそうだが、他界された為遂に実現出来ず残念な事であった。）

後で聞いた話だが、先生の御渡満には周囲から強い反対があったそうである。真に尤ものことで極寒の満州で万一のことでもあれば申訳ない次第で、よくも踏切って下さったと、感銘深いものがあった。

先生の御渡満は表向きは柞蚕業界の視察と云うことであり、大連到着の際、船中での記者会見でも、その様に述べておられた。大連では女婿の大連高等法院在勤の中里龍氏の官舎に旅装を解かれた。休憩の後、関東州綿業聯合会の人からシューバーを借用し、特急亜細亜で新京着、駅前のヤマト・ホテルに投宿された。此のホテルには湯川秀夫氏（蚕一）の令息が勤務しておられ、室のレザープから食事のことまで格別の便宜を取り計らって頂き、万事好都合であった。

その翌日からが大変であった。本人から事情聴取・主任弁護士との打合せ等、なかなか忙しい。御来満が新聞に出ているので会見の申込みがあり、作戦上、相談の場所を変える必要が出て来て、東朝陽路の私の家にも来て頂いた。ホテルへの帰路は歩くと云われる。零下何十度かで、マツ毛や鼻毛が凍りつくの時折り手で払われるが、寒いとは云われない。途中康德会館の地下室で蕎麦を食べられる。

こんなことが続き、黙々と想を練られたが、其の間、満州柞蚕会社だけでは顔を出された。

公判当日、先生には先ず裁判長に会われ、特別弁護のため来満した挨拶を述べられた。若い裁判長としても教え子の為老軀をも顧みず、法廷に立たれる老師の心情には感激し、心ひそかに涙したのであると想像されたのである。

先生の弁論は本人の人となりや、教育者としての立場等から纏縷述べられ、最後に「国家非常時に際会して有能な人才を必要とする時、斯る問題で働く機会を失うのは本人はもとより天下国家の為非常に損失なので、本人将来の行為については自分に於て全責任を負うから」と云う様なものであったが、法廷全体に異常な迄の感銘を与えたものと確信している。斯くして先生に御願いたしました総べては済んだ。翌朝の新聞には大見出しで「恩師涙の弁論」として大々的に報道されたが、吾々同窓としてもよき師を得た感激で胸一杯であった。

其の夜、湯川さん始め集まった同窓で慰労と送別を兼ねたささやかな宴を催した。席上先生から、とにかく満州と云う遠く離れた処なので、互いに仲よく助け合つてやって呉れと希望を述べられた。

さて先生の御帰途は奉天・大連と其の地在住の同窓がリレーして中里さんまで御送りすることになった。翌朝は奉天の満州棉花会社勤務の香山清和君（紡三）に同行して貰った。そして数日後には便船での記者会見で満州の柞蚕は此の前に来た時の数倍に増産され有望だとの言葉を残して内地に帰られた。

此の様にして先生の御旅行は無事終った。御苦勞様でしたと申

す外なく、吾々としてもホットした次第であった。
御帰宅後、先生から掛軸を送って頂いた。此の書は終戦時の混乱にも拘らず無事持ち帰れたのは望外で、之れを見る度に當時を追憶し感無量のものがある。

（元満州纖維工社天津事務所長）

御揮毫の額を見あげて

（大、二三、蚕） 中 島 茂

印
小人皆俯從其
易不能力行
其難故禍敗
及之君子勞
逸其難不能
逸居其易故
福慶流之
昭和七年壬申春
為中島君
榛嶺岡園

わせていただいている。

さて、話は別だが三年生の時、思いがけなくも、私は養蚕科の

先生のこの揮毫は、昭和七年の春に、当時の宮崎高等農林学校で催された全国官立農蚕水専門学校長会議へのご出席の砌り、宿舎で私のためにお書きくださったものである。私はその後これを額におさめて、書齋の正面に掲げ、日夜仰ぎみながら、ここに三十年を過ごそうとしている。針塚先生は、機会あるごとに、学生に「進んで難局にあたれ」とおさとしになった。この詩を私に下さったのもそのお心と思い、今もって味

クラス総代にさせられた。クラス中の最年少者がなぜこの役をさせられたか、今もなおはっきりしないのであるが、おそらく、色々の勉強をしなければ、人並みにはならないとの学校側と級友の思いやりからでもあったのであろう。幸いにも、同期の製糸科総代は、青木友弥君であり、紡織科は浜香三君で二人とも学生仲間では兄き組で、当時のいわゆる「専門のおっしゃん」にびつたり君だちであったので、心強い限りであった。ところで、例の蚕蠶供養塔建立の議が、学生一同から起こった時のことである。右の総代三人が、校長先生に相談におよんだものである。それはたしか大正十二年の秋であった。

私はどういふものか、かねがね校長室が鬼門で、入る前から足腰が、がたがたふるえるのが習性で、当日もその生態に変わりはなかった。浜・青木両君の後から、おそろおそろ入って行って座についた。そして供養塔建設基金の募集について話したのはよいが、私などは勿論、さすがの青木・浜両君とても、その募集方法について、頭をかくえて困却のてい、というところになると、針塚先生はまさにこの時ぞ、とばかりに「進んで難局に……」と、例の御垂教、一時間余。そこで供養塔の入魂にさきだつて、あたかも三人が魂を入れて頂くという仕儀とあいなったのである。

「助手を命ず、月俸五十円、養蚕実習部勤務」、これは卒業後、一カ月目に先生から戴いた、生れて初めての辞令というものであった。その後、辞令も何枚かもらったが、一番有難味のあったものはこれである。早速蒲生先生の初代の助手として、現郡は製糸

蚕種課長の、永井覺葉手と共に、ミクロトームにとりくみ、後教師として、野生絹糸虫論の講義担当を許され、張り切っていたところ、半年目の昭和二年十月のある日、突然、校長室に呼びだされ「君を宮崎高等農林にやると宮原校長と約束してきた。担当は養蚕学と動物実験だ」とのお託宣で、全くの青天のへきれきであった。因みに宮原忠正先生は宮崎高農の初代校長であり、松代の出身で、針塚先生とはお若い時からの友とおききしていた。君のためによいと思うが、行ってみないか」などというのではなく、文字通りの下命に驚いた私は、「自信がないからもう一年間、母校で準備の勉強をさせて下さい」と懇願した。勿論おきき入れのあらう筈もなく「まず行け！ 而うして勉強せよ！」である。私はふしようぶしようで、九州宮崎に赴任した。ところが来てみて、更に驚いたことには、前記の担当学課の外に、一週三回、一年生の英語を受け持てと、宮原校長からいわれた。よくよくきくと、それも針塚校長の意見で、中島が英語の勉強をするためにとのことであった由。柳こうりを背負つて、母校へ帰ろうかと考えたのも一度や二度ではなかった。けれどもそれでもならず、三カ年は歯をくいしばり覚悟して、英語の代用教育をした。それに流した冷汗は、ちつとやそつとではなかったが、今にして思えば、あれもこれもみな針塚教育の情けの洗礼であつたのだ。かようにして「まあ、三年」と思ってきた宮崎も、そのまゝ今日まで、三十有六年、その間、星は移り、人は変わり、時潮の大波は絶えなかつたにせよ、大した過ちもなく、過ごすことのできたのは、針塚精神

のたまものである。私の心の中に流れているその精神は、今もって微動さえないどころか、日々に新たで、永遠の光のように私を導き、力となって励ましていて下さる。

先生の揮毫額をジーンと見あげてこれを書いている今、先生のお姿がほうふつとして浮かび、誠に感慨無量である。先生の御薫陶に心から感謝し、御冥福を祈ってやまない。

(宮崎大学農学部教授 農学博士)

スポーツと針塚先生

(大、一三、糸) 小山 清

校友会の部制 大正十年から同十三年頃の母校校友会には総務・文芸・柔道・剣道・弓道・山岳・庭球・弁論の八部があり、

主なる各部の部長は次の通りであった。

柔道 岡 徳次郎先生
 剣道 和田仙太郎先生
 弓道 内田 浩先生
 庭球 佐藤利一先生
 山岳 井上柳 梧先生
 弁論 早川直瀬先生

なお柔道部は岩崎喜三郎先生が教師として実際の練習指導を受け持ち、更に飯塚国三郎八段を師範に委嘱し、親しくその指導を受けて居た。剣道部は同じく早野清三郎先生が教師を務められた。庭

球部は清水寛孝先生がコーチ格で、いつもコートに出ていられた。山岳部は土地柄とは言え、井上部長を始め、針塚校長も自然の愛好者として、しばしば登山され、学内教職員の方々・その御家族・学生にも、夏期登山が盛んに行われた。柔剣道は日本特有のもので、その精神は校風の基礎ともなり、針塚校長はそれ等寒稽古にはかつて一日も缺かしたことなく、その練磨奨励に努められた。

柔道と針塚先生 学生時代遠路徒歩で講道館の寒稽古に出席して、柔道本来の精神と技術の体得に精励されたことは、衆知の通りである。先生は常に「柔能制剛」を柔道の極意として、時に臨み能くその精神を敷衍して、学生に訓示し、又その際しばしば加納治五郎先生の「質実剛健」の言を引用された。

私が三学年の時飯塚師範が、やはり師範として指導されていた慶応義塾大学の柔道部を迎えて、対校試合をしたことがあった。当時の学生柔道界の花形阿部四段兄弟・小川三段など、錚々たるメンバーに対し、わが校は梅沢治三郎(糸一二)・鈴木宝鈴(糸一二)・小山清(糸一一)・塚田卯平太(糸一〇)・坂路善一(糸一一)の陣容で、正々堂々と闘った。翌年早稲田大学柔道部の大将二宮宗太郎四段をコーチに招聘した。これ等は勿論針塚先生の意図によるもので、後年東日本高農大会・全国高工大大会に連続優勝した温床となったのである。

大正十二年には上田中学校に加納治五郎先生をお迎えして、昇段柔道大会が催され、母校からも何人か参加し、塚田卯平太・鈴木宝鈴・梅沢治三郎・坂路善一・小山清の五人が、加納先生から

直接「日本講道館柔道初段に列す」の免許状を授けられた。これ
もすべては針塚校長のお力添えであった。

対抗リレー・レースの抗議 母校運動会の最高呼び物は、対
科リレー・レースであった。各科はこのレースの優勝を目ざして、
選手の見定、それが練習に万全を期し、応援団も専らこのレース
目標に結集された。大正十年運動会の各科選手名は

養蚕科 富田治衛(一一)・川島熊太郎(一二)・猪瀬親二

(一二)・小沢周一郎(一〇)

製糸科 小山清(一一)・和田普(一二)・川船卓爾(一〇)

・林直助(一〇)

絹紡科 安倍恒雄(一二)・野口新太郎(一二)・橋詰英雄(四)

・桜井隆夫(四)

と言う駿足揃いだった。レースは最初から接戦を続け、製糸科の
ラスト林君が養蚕科の小沢君を僅かに抜いてテープを切り、三着
紡績科で、勝負決定と思った瞬間、三着を走っていた紡績科選手
に製糸科応援団の一人がコースでタッチしたと言う理由で、審判
長石倉先生は製糸科の失格を宣言し、二着の養蚕科を一等と発
表した。既に一着がゴールイン後の出来事だから、これを失格さ
せることは全然不当であると、製糸科は応援団を中心に審判長
を取り巻いて、激しい抗議を続けた。時の製糸科応援団幹部は華
岡(当時住吉)弥治郎(一〇)・合田信一(一一)・山本奈良三
郎(一一)・石井謙三(一一)の諸君であったが、何か起こらね
ばよいがと、満場総起ちになった。かくて何時果つべしとも思

われない時、針塚校長は静かに席を起ってその場に臨み、何か二
言・三言仰言ったようだったが、猛り立っていた応援団の人々も、
一応おとなしくなり、その場を引揚げた。その後何回か製糸科有
志の会合を重ね、学内卒業生有志の尽力もあり、石倉審判長の公
式弁明を得て、針塚校長の解決案たる一着製糸・一等養蚕科と言
う妥協案を承認し、爆発直前まで行つたこの事件は、円満解決
した。その後一カ月程過ぎた日、製糸科選手四名が校長室に呼ば
れ、当時流行の銀製エバーシャープをねんごろなお言葉と共に、
記念品(一着賞)として頂戴した。全力を尽くして勝ち取った勝
利を失格させられて、日夜歯を食いしばって残念がっていた私ど
もも、茲に始めて校長の温情に感激し、すべてを水に流して明朗
な気持ちを取り返すことが出来た。後で聞けば毎年一着がゴールイ
ンすると、その瞬間応援団がコースになだれ込み、次順の選手の
妨害となるのが常だったので、その年の審判長たる石倉先生は、
予め各科応援団に「今年からあれを厳禁しよう。万一レース終了
前に応援団がコースに入った場合は、その科を失格させる」と固
く申し合わせていたのが、あの場合興奮して誰れもが、頭になか
った結果だった。

野球部の新設 大正十三年校友会総会が講堂で開催された。

当時の校友会には野球部が無く、野球の経費は、同好学生の釀出
と、阿形先生・林先生・清水先生等の寄付金で賄って居た。よっ
て同級の石原六郎君と相談し、この総会に野球部新設を提案する
ことにした。石原君は弁論部委員、私は柔道部委員として総会に

出席し、席上野球部設置を力説したところ、早川先生などは時機尙早を理由に反対されたが、針塚校長は最後に一言「人物養成には野球も他のスポーツに劣らぬ立派なものである」と、賛意を表して、新設に踏み切つて呉れたので、大正十四年度から校友会に野球部が追加され、正式に部費の予算が計上されたのである。針塚先生のスポーツに対する御理解を示す一例として、忘れられないことである。

(交水製糸KK専務取締役)

針塚先生の確信

(大、一四、蚕) 小 泉 清 明

その頃はなんといっても針塚先生は雲の上の人であつたから、直接お話するなどということはなかつたが、京都に遊学中先生は二回関西にお出でになられ、同窓生の懇親会の席上で親しくお話す機会をもつた。

当時は人絹が繊維として注目されてきた時代で、先生は話でも印刷物の上でもよく「人絹の将来はわからないが、現在の品質は天然絹糸に及ぶべくもない。蚕糸業は人絹のために衰退するのではない。なにしろ絹はアメリカ娘の靴下として信仰にも近い繊維だから」と主張しておられた。私は繊維に関心をもっていたわけではないが、先生のお説はしつくりこなかつた。私も蚕糸業が没落してゆくとは考えなかつたが、人絹の将来は決して軽視でき

ない。科学の智識は無限に延びてゆくから、現在の品質が強度や耐水性あるいは光沢の点などに欠けているからといって、将来天然絹糸の域に改良できないとはいきれず、蚕糸業はいつまでも安閑とはしておれない。先生に益をさしながらこういう意見を二度にわたつて申しあげた。その御返事は依然として先に書いた意味のものであつた。そのお言葉は確信に充ちたもので、それをいわれる時の態度はき然としておられた。私は当時学生としてロエブの蛙卵の人為単為生殖の論文や、マイエルホーフやヒルの筋肉収縮の化学的メカニズムの論文を原著で読み、生命機械論にしやすいして氣負つていた頃でもあり、先生の御意見にはどうしても同意できなかったが、それ以上の論争はさし控えた。

私は京都から昭和四年創設間もない台北帝大に奉職し、翌年結婚、その媒酌を先生御夫妻にお願いした。台湾に渡つてからは内地に帰る機会も少なく、帰った時は新参町のお宅に参上していろいろのお話は承つたが、先生について今にいたるまで頭に刻みついて離れないお言葉は人絹対絹のお考えである。

それから三十余年の歳月が流れた。縁があつて母校に勤めることになり、繊維全体のことに取り組むハメになつた。現在科学や産業の狀態は昭和の初めには想像もできない程度にまで変わり、産業の急速度の変遷や技術の革新にともなう国家の要請は、大学の性格にまで大きな影響を及ぼしてきた。われわれの学部機構や内容も昔のままの姿ではおられない。学部の方向は昔針塚先生のお考えになつておられたものとは著しく変わつてゆく。先生が長

年かかって築かれた伝統の本質的なものはもちろん保持されていくとしても、学校が指向する方向は不変ではすまされない。すべて時代の変遷のなす業であろう。今われわれが是と信じていることも、やがては古典的なものにならざるを得ない。針塚先生のき然たる確信のことを想う時、時の偉大な力のことが今更ながら念頭に浮ぶ。

われわれの学部では針塚先生の時以来ながく歩んできた学部機構が、時勢の移り変わりに対して、このままでよいかどうかについて、一昨年来白熱した討議が行われた。その結論として生まれた改新拡充案は幸いにその大部分が本年から実現した。その議論は激しく進歩する科学と技術、それに基礎をおく業界の状況、大学のありかた、繊維学部の将来などに集中した。その議論の途中で、私は針塚先生の人絹対天絹のお考えは果してご本心から出たものなのか、それとも蚕糸専門学校長のお立場からの表面的なご発言なのか、ふと疑問に思うことがあった。最近ある人から実は先生も人絹の将来については深い関心を寄せられ、絹のゆくえを心配しておられたことを耳にした。繊維化学科の新設もそのお考えに胚胎したものであろう。そうだとすれば今回の改新問題も、すでにその萌芽は針塚先生のお心持ちの中にあつたといわれよう。

(信州大学繊維学部長 理学博士)

上州人針塚先生

(大、一四、糸) 萩原清治

私が初めて親の膝元を離れて勉学のために上田へきたのは、大正十一年四月八日灌仏会の日であつた。その日郷里は春雨が烟りうすら寒かつたが、それでも桜が満開だつたのに、上田の木々はまだ冬姿をしているのに驚いたものだ。

その頃私の村では専門学校へ入るものなどなく、私が初めてであつたので、村の人々が祝つて送つてくれた。これは私の村が教育に不熱心なこともあつたが、村全体が裕福で上の学校へ出す必要のなかつたことも原因していた。上田に着いて校門前の玉屋旅館に泊まつた。友人の小林英三君といっしょだつた。彼は(当時の茂呂村出身)有望な青年だつたが三年の校外実習の時、姫路の海水浴場で溺死してしまつた。郷里を出る時、上田の学校には洪川在出身の針塚長太郎と言う偉い先生がいるから、訪ねるようにと先生の郷里に近い親戚から言われたものだ。

入学式も終り、しばらくたつたある日、群馬県人会で新入生の歓迎会を、田町の谷口(今はない)でやってくれることになつた。その時刻に吾々八名は言いあわせたように、紺緋の着物にセルの袴をつけて参加した。会が始まる頃になると背広を、また羽織・袴をつけた立派な人が何人も見え、その中に針塚先生もいた。吾々もこれらの人々の仲間になつて待っていた。いよいよ会が始ま

り席につくとなると、新入生はお客だと言うので背広組の次に座らせられた。そのうちに美人が数人現われ、この人達が背広組や先輩達と、さも親しげに談笑しているのを不思議にもいい、あとでこれが芸者と言うものだと言われおどろいた。この人々が酒をつぎにきて「兄さんどうぞ」とか「学生さんどうぞ」と言われ、

盃を出すのだが手がふるえて芸者達から純情だと笑われたものだ。今の学生達とはまるっきりちがう。生れて始めてのお酒、ことに酒に弱い私は真のように赤くなり方々から冷かされた。だんだん時間がたち自己紹介となった。新入生は皆あがってしまつてまともな挨拶はできなかった。そのうちに背広組の番となつて挨拶が始まつた。針塚先生は入学式で顔を知っていたが、他の人々は誰も知らないのだ。驚いたことにこの人々の中に法制経済学の先生で主席教授があり、蚕糸経済の先生や機械工学の先生など有力教授があり、養蚕の先生あり、織物の先生あり、これがまあ、皆群馬県人かと目をまるくして驚きもし、また力強くも感じた。郷里を出る時に前と別の親戚（現前橋市下川淵町）が経済学の先生と昵懇だったので、先生宛の添書をもつて来たが、この添書は卒業の年まで出さなかつたので、先生と私の個人的つながりは卒業までなかつた。つづいて先輩の小見釜無さん（蚕三死亡）、西山市三さん（現京大教授）（蚕九）、石原石司さん（蚕九）、須田圭二さん（元本校教授）（蚕二）などが挨拶された。このように昔の本部の教職員には沢山の群馬県人がいた。これからいよいよ学生生活が始まつた。そしてこれらの先生方には他の先生方より、より

強い親近感をもつた。日がたつにつれこれらの先生方の人となりもわかるようになった。わけて針塚先生には尊敬の念がつかつた。しかし親近感をもつからと言って特別に先生方のお宅を訪れると言うことはなかつた。

元来、上州人は目上の人に阿ねる（諂う）と言うことは好まなかつた。これが上州人が出世をしない大きな原因だとさえ言われている。が反対に弱い人に対しては自分をかえりみず同情すると言う気概があつた。この性質が上州人に「強きを挫き、弱きを助ける」と言う真の俠客的精神を育てたものであろう。針塚先生は弱いもの（不遇のもの）を助けると言う点では、ほんとうに立派なお心をもつており、吾々は在学中、卒業後の在勤中にも幾多の実例を見聞しているのである。例えば学年末の学生の及落の教授会においても、常に学生をかばい先生自ら落第を主張したことは聞かなかつた。このような優しい心がまた生き物をいつくしみ、学校への出勤の途中、野良猫や野良犬などがいると学校へつれて来て食物をやり、飼わせたということも度々きかされた。

また速足などで持ち帰つた木の苗を校内に植えられて大切に育て、無断で伐採などすると大目玉をちょうだいしたとも言われる。これが四十年、五十年たった今、学内いたるところに亭々としておい茂り、恰かも学園の繁栄を象徴するように聳え、若人の憩いの場をつくっているのである。この木々の盛んな有様こそ針塚先生の佛をしのぶのにふさわしい姿ではあるまいか。先生はまた研究の方面にも深い関心をもち、機会あるごとに学園内を巡回し（散

歩であろうが）研究室を訪れ、ことに若い人々の話など喜んできかれた。

群馬県人会でよく山野に遠足したが、都合のつくかぎり参加され、いつも先頭にたって歩かれた。先生の「挺身従事」と言う信念をこんなときにも身をもって示して下さったのである。昔の教え子はいいつもこの気持を体していたものだが今の学生はどうだろうか。先生が学園を去られ、この世を去って幾星霜、上州人の気風をひきつぐ吾々の仲間は生前、先生のお宅を訪ねることは少なかつたが、常に先生を心から敬慕し、また私淑していた気持は強かつた。これが上州人の伝統を踏む姿なのではないか。

私はかつて繊維学新聞の編集部から全教官に「あなたはどんな希望をもっているか」と言うアンケートを求められた時（昭和三十三年四月十二月版）「①世の中のすべてのことが公平・無私であること。②人生の最後において悔いのない億い出をのこしていただけること」と答えた。

内村鑑三先生は「後世への最大の遺物」として「吾々は後世に遺すものは何もなくとも、後世の人にこれぞと言うて覚えられれるものは何もなくとも、あの人は生きている間は真面目な生涯を送った人であると言われるだけのことを後世の人に遺したい」（矢内原忠雄著、続余の尊敬する人物、岩波新書）と言っておられるが、針塚先生こそ、このような生き方をした人の中に入れられる一人ではあるまいか。

（信州大学繊維学部教授 農学博士）

充実之を大と言ふ

（大、一四、糸） 笠原重龜

大正十一年四月絣の着物に袴姿で私たち新入生は、第四教室に初めて針塚校長の倫理の講義に出た。春の陽の朗かな日、新しい学校への希望と不安に胸をどろかせながら、細長い机に未だ見覚えぬ同級生と膝を交えた。

初めてみる教授服の厳かな校長は、温顔美髯をたくわえて、先ず黒板に達筆で大きく『充実之を大と云ふ』『充実にして光輝あるを聖と云ふ』と書かれて、おもむろに我々に向って「諸君の入学を祝うと共に学生生活の充実を計ることは人生の充実の第一歩である」と色々の実例を挙げて、その意義を烈々たる口調の裡にさとされた。私たちはその国士的風格に、深い感銘と尊敬を覚え、この学校に入学した喜びを改めて誇らかに感じたものだった。一年間の論語の講義に含まれた精神教育は、上田生活三年間の鉄筋として、我々の学生生活を充実せしめた指針であった。

昭和九年学窓を出て久方ぶりに学校を訪問した。当時私は新興満州国の素晴らしい構想と発展に、大きい憧憬を以て視察の旅を計画した。校長室を訪れて、新しい日本の行き方と大陸進出の必然性から来る青年の意気を語り、尙當時低迷していた日本経済の将来について、先生の御意見を拝聴した。先生は、大陸の氣宇壯

大なる事を感じ取り、新しい日本の歩みに身をゆだねるも大いに喜ばしい事ではあるが、人それぞれの立場と使命がある。蚕糸業日本の将来を担うべき若者としての、反省も疎かには出来ない旨のおさとしもあった。そして広い見聞の爲にと、二、三の紹介状を戴いた。その中に満州国に本間国夫(蚕一七)君と云う快男子が居るから会うがよいと、特にお話があった。渡満して月余、私は本間君に会う機会を失い、今日迄君とは未知の間柄であるが、新国家建設の大きな槌の音を見聞して、異常な感激で帰国し、再び針塚校長を訪れたとき、先生は又対外貿易の現状を語り、蚕糸業の護り立つべき所以を説いて、人間の在り方は生活の華々しさにはない。心の豊かさにあることを教えられた。私が上田を去ってから一月ばかり経て、先生より一本の書を送られた。

権能_二輕重_一、物_二而不_レ能_二目定_二其_一、輕重_二、度能_二長短_一、物_二而不_レ能_二自度_二其_一、長短_二、心則能_二是非_一、物_二而又自知_二其是非_一、是所_レ以為_二至靈_一哉。

私は浅学で、達筆な立派なこの書が読めないで、先生に教えるを乞うた。すると直ちにお手紙を戴いた。それには「ハカリはよく物をはかるが自分をはかることが出来ない。モノサシは物の長短をはかるが自分の長短をはかることが出来ない。唯心文は物の是非善悪を知り分けると同時に、又自分自身の是非善悪を知り分ける事が出来る。これ則ち至上の貴き物となす理である。故に人の心をよく研き上げる事が大切である。権や度となつて人の輕重長短をのみ謂つて、自分の事が見えぬ事のない様にするのが肝要な

りと云う佐藤一斉の言志録の一節なり云々」とあり、私は感激して礼状を書いて自分の座右銘とすることを誓つた。そして佐藤一斉の言志録を續いて、先生の訓育の奈辺にあるやを追ひ求めた。正しい生活とは往年教えられた心の充実であり、平凡の非凡であることが感得され、先生の御人格が伝統の武士道的の極めて高潔で、我々の精神生活に偉大なる影響を与えられた所以のものを知ることが出来た。爾来年移り星麥り二十有六年、先生の警咳に接するの由なく、先生を彷彿とせしめる書の前に端坐して想を新たにしている自分である。

(笠原製糸取締役須賀川工場長)

学者としての先生と温情の先生

(大、一四、蚕) 山口 定次郎

文部省の視学官から校長として赴任されたときだけ聞いていた私たちは、先入観として、先生は教育行政の人であるという印象をうえつけられていた。ところがその後先生の著書文献を調べてみて、決してただの行政官教育者ではなく立派な科学者であり論客であられたことを知った。そこで先生の著書と文献を記してみる。

針塚長太郎先生著書と論文

著 書

- 一、新刊養蚕学(一九〇〇)明、三三、針塚長太郎
- 二、絹糸学(一九〇一)明、三四、針塚長太郎

- 三、新編桑及蚕（一九〇五）明、三八 針塚長太郎、金子昌太郎
- 四、育蚕学大全（一九一〇）明、四三 針塚長太郎、洞口猷寿
- 五、鮮滴の蚕糸業（一九二七）昭、二 針塚長太郎
- 六、本邦農業と農業教育論（一九二六）大、一五 針塚長太郎

論 文

- 一、絹糸のアルカリ及び酸に対する性質 大日本蚕糸会報一〇（一一二、一一三）明、三四
 - 二、絹糸の葡萄糖に対する性質 農学会報一二二大、五（一二二、一二三）明、三四
 - 三、蚕業経済より観たる桑の栽培 蚕業新報 二四（二八二）大、五
 - 四、実験遺伝学を基礎とせる蚕種改良の方策について 蚕業時報 二（六）大、七
 - 五、蚕品種の退行の原因と予防法 大日本蚕糸会報 二九（三三六）大、九
 - 六、前代の飼育法は次代に影響する理由 大日本蚕糸会報 三〇（三五二）大、一〇
 - 七、朝鮮及関東州へ蚕業家の移住を勧む 大日本蚕糸会報 三四（三九五）大、一四
 - 八、蚕糸業救済について 大日本蚕糸会報 三五（四一九）昭、二
 - 九、本邦蚕糸業の進むべき道 蚕糸界報 三九（四五五）昭、五
 - 十、蚕糸業を語る 蚕糸界報 四一（四七九）昭、七
- このように絹糸化学からはじまって養蚕、栽桑、蚕種製造、育

種、遺伝などと広範のものである。私は興味をもってその文献二、三を直接にひもといてみた。

「絹とアルカリおよび酸」の論文は大日本蚕糸会技芸委員としての論説である。絹に対する種々のアルカリ及び酸の溶解性・抵抗性などを中心として調べたもので、繭解舒のこと植物繊維との相連、多くの絹糸虫の種類とそれ等の性質など深く論及されている。今から六〇年前に研究されている点に最大の敬意を払わざるをえない。

「蚕品種退行の原因と予防」も学説としての論文であるが「宇宙に存在する生物中、全く区別しえざる二個の動植物なく、また全く相等しき二個の生物なし（中略）これを生物の変異性という」「生物に変異性あり、故に改良あり退化もおこりうる」という書き出しで、(1)雑婚による退化、(2)近親繁殖による退化、(3)環境による退化、につき精細に論述し、それぞれこれら退化に対する予防法を論じている。

「前代の飼育と次代の影響」も学説である。要約してみると「このことは今日いつも問題になっており、種々の実験結果がまちまちであつて、その原因は、色々あるが次のような点に注意を払うべきであらう。すなわち実験上の注意として、(1)材料は純粋種であること、(2)前代の飼育法の差を小さくすること、(3)実験前迄の環境を同一にすること、(4)次代の飼育法を全く同一にすること、すなわち試験区の同一条件、精密な機械、材料の無作為撰択、同一人の測定などが肝要である」と述べられている。

この見地に立ち先生は広く論及し、また、蛹体重、産卵数、繭層重につき御自身の実験をもって証明している。今日の研究者でもこのように総合的の見解のもとに実験に着手し結果を考察しているものは少ないように思われる。

一方蚕糸業政策についても、堂々たる論議を張られ、「朝鮮及関東州へ蚕業家の移住を勧む」(大日本蚕糸会報大正一四年一月号)では、前年朝鮮及び満州を視察した結果の結論であつて、日本の蚕糸業を絹機業中心に移行せしむべき根本理念を述べたものであり、「本邦蚕糸業の進むべき道」(蚕糸界報昭和五年一月号)では、養蚕の協働化・養蚕組合の設立・稚蚕共同飼育・産繭共同処理等、日本養蚕業のあるべき進路を示し、それは現在に至るまで、一貫してわが養蚕業のあるべき姿となっている。

先生の激励と温情 「やあ、どうですか」と助手の身分の私達の室にもやって来られることがしばしばであった。蚕の消化官のX線透視実験に夢中になっていた頃である。私の自製の速写X線写真装置を手にとられ、又フィルムを細かく御覧になって「ウムなかなか面白い、大いにやりたまえ」と。それから教室主任の蒲生先生のはかばかしいで、レントゲン講習会に二週間ほど上京することができた。うれしいと思つた。

私は蚕種学を担当するようになってから、学校にねだつて人工孵化室を作ってもらつた。当時のこととて文部省も必要以上にぜいたくに設計してくれた。内壁は頼みもしないのに耐酸性金属を

張つてくれ、床も立派なタイル張りである。序でに私の考案で電熱自動調節器付きの人工孵化恒温槽も作ってもらつた。出来上つてから先生が来室され「やあタイルとはぜいたくなものだね。だがこの浸酸槽の着想は面白い。早く普及させるとよいですね。」と激励された。冷汗をかいたり、おだてられたり、思ひ出のたねである。

現在の菅平ヒュッテは昭和八年ごろ建てられたものと記憶しているが、この地をえらんだのは針塚先生と佐藤(利)先生である。一、三〇〇米の高原で、冬期よい水が湧き出る場所はえがたいが、山野跋涉を得意とされる針塚先生は、たちまち探しあてられた。

ヒュッテは今、夏も冬も好適のレクリエーションの場所として有効に用いられているが、創設当時私は菅平高原が冷涼原蚕飼育地として適當ではないかと考え、気象環境をはじめいろいろ調査をしていたので、ヒュッテは最良の足場になった。先生はこれを知つて「よろしい、君を校友会山岳部長に命ずる」ということで実質はヒュッテの管理を一任されたわけである。それから可なり長い間ヒュッテは私の家のような親しみで養蚕をしたり管理することができた。

このように先生は、いつも私達若いものの室を訪ねて、激励され、また研究をやりよくするような温かい心づかいで、指導して下さつた。ひたすら感謝にたえない。

入学と同時に聴いた論語や、挺身従事のおしえ、校庭の除草と心の除草、一葉の桑、一粒の繭も粗末にするな、手紙の書き方、

誤字、言葉使いに注意せよなどにいたるまで、いまなお一つ一つが私達の心の中に芽生え、生長しているのである。

書家としての針塚先生は、絵と写真の井上先生、絵と書の石倉先生と共に、学内美術クラブである甘茶会のメンバーとしてこれを生長発展させて下さった。秋の美術展は学校のみでなく上田市とその近郊の同好の士を喜ばせた。長い間甘茶会の幹事をしていて私はこの面でも数々の思い出を残している。

(信州大学繊維学部教授 農学博士)

先生の面影

(昭、一四、蚕) 宮前 邦雄

先生は温情に富んだ極めて几帳面な方であった。それがよく御風格に現れていた。

校門に入ってこられる前向きの先生、学校の廊下を歩いて行かれる後姿の先生、その面影が、本当は遠い昔のこととなったのだが、今尚現実のことにように、母校の情景と共に眼前に浮かんで来るのである。

私が初めて、父から先生のことを聞かされたのは、小学生の時点で、今にして思えば、初めて官立の蚕糸専門学校が上田に創立され、若い文部省の視学官であった先生が、初代校長として、洋々と新学校に乗り込まれた頃の話であったと思う。先生は前橋中学(当時は本橋中学)から東大農科大学に進まれたのであるが、中

学生時代は勿論大学生時代でも休暇で帰郷されると、骨身おしまず、よく家業農事の御手伝をされたので、近郷近在の人々の賞賛の的であったそうである。御父上が非常に厳格な方であったとのこと、御両親の薫陶もあってのことか、青少年時代から何事も実践で行くと云う秀でた人柄であったようである。

私が上田の二年生の頃、当時中学生であった御次男が逝去されたので、お悔みに伺った時のこと、袴をつけ泰然と正坐された先生は、霊前で、「日頃から心がけの良い子供であった」と、ことこまかくお話になった。温情あふる父としての先生のお姿が思い出されるのである。

在校三年間、私は修己寮で過ごしたので、寮生として指導を受ける機会が多かった。寮中で時々事件が勃発し、上級生として何度か、校長室にお詫びに出たことがあったが、何時も温顔をもってむかえられ、決して本人を呼び出すようなことはなく、常に校風は寮から生まれるのだからよく本人に伝えるようにと、むずかしい顔をされたことは一度もなかった。

修己寮の同期生が卒業記念に植樹することになり、校長室に向いて学校から銀杏の木をいただくことをお願いした。先生はこころよく即決され、そのまま椅子からたたれて、一緒に校内をくまなく廻られ、当時道場の裏に育った同じ大きな二本の銀杏の木を指定され、更に修己寮前まで出かけられて、将来もう一棟寮舎を増設する計画であるからと、玄関前に植樹の位置まで示して下さった。しかしこの二本の銀杏の木は現在、切り払われてか

げもかたちもなくなっている。若しわれわれが念じていたように、生存していたなら、今頃は大本となつて、黄色の葉を飾り、寮前のボブラのささやきと共にその昔の校長先生の面影をも語ってくれたであろうに、これも戦争のもたらしたいたずらと、諦めざるを得ない。

卒業式が済んで、私は翌日帰郷することとなり、最後の御挨拶に校長室に伺つた時のこと、ドアを開けると、先生は何時もの様にほほ笑まれた風貌で机に向われ、その脇側に早川先生がおられた。私は先生の真向かいに坐つた。しばらくして先生は、机の左側の引出から一個のリンゴとナイフを取り出し、白紙の上で、「分けて食べようか」とリンゴを三等分して、一つを先生、一つを早川先生、他を私に下さつた。学生として最後のお別れではあるし、私は云いしれない感激に打たれ、頂き終るまで夢中であつた。先生も、早川先生も、私と同郷群馬県の出身であつたので、話は群馬県出身の蚕糸業界人物伝に及んだ。今思えば、それは社会に巢立とうとする私のために、先輩に見習えと云う御心づかいであつたのかも知れなかつた。

先生は私の勤め先農林省蚕糸局にも、しばしば見えられ、局内同窓の動静をわが子のように見て廻られるのが常であつた。蚕糸局長室にも時々御案内したが、歴代の局長さんが皆、先生に對しては特別丁寧に応待されたのも、先生の仁徳の現われであると、ひそかに感動させられたところであつた。針塚先生は、一個の校長さんではなかつた。たしかに、立派な教育者であつた。

晩年を渋川の御郷里に過ごされたが、御逝去が報ぜられるや、各地から同窓多数がかけつけた。祭壇に飾られた勲一等を佩用した大礼服姿の御写真、正に日本蚕糸業史を語る「蚕糸教育界の偉人」の面影であつた。

(元農林省蚕糸局課長輔佐)

流汗鍛鍊

(大、一五、蚕) 内 川 勇

針塚先生！ 先生こそはほんとうに明治の産んだ偉大な教育者であつた。ある意味において日本興隆の良き時代の国士的風格と英國紳士の精神とを程よく調和して身につけられ、先生のあるところいつも駘蕩たる春風に包まれるような、おおらかな雰囲気醸し出されるのを常とした。一面また怯懦を排し勇往邁進の氣象を尙ばれ、學問を愛し研究を奨励され、身を以て全校の生徒を率いられた一代の立派な御業績は、忘れようとしても忘れられないところである。

私をはじめ先生に個人的に御知りを得たのは(その前に既に先生の方では御存知だつたようであるが)、上田の学生の一年生のときの寒稽古の帰途であつた。当時私は城下の親戚の家に寄寓して通學していたのであるが、ある朝柔道の寒稽古に汗を流して朗かな氣持で帰途についたところ、大宮神社の近くで、凍った朝

の空気を震わせ、後から足早に近付いて来る靴音を聞いた。そのうちに追付かれて、追越されるときヒョイと見るとそれが矢張り寒稽古から戻られる針塚先生であった。一礼して後に随って歩きはじめると振り向いて「君!! 寒稽古の気分は良いものだね」と話しかけられた。それから先生の御宅へ道の分れるところまで、長い常入の通りを種々なお話を伺って随行したのであるが、そのとき先生から与えられた言葉が「流汗鍛錬」ということであった。

それが御近付のはじまりで「君!! 暇があったら遊びに来給え」と言われた御言葉に甘えて、それから度々御宅に参上し、何かと学校以外の御指導に与ったのであるが、いつも慈父のように諄々として社会事情や学問の道を説かれ、また時には先生のお若い頃の数々の興味ある御話をユーモアまじりに話されるのをおききして思わず大笑するときもあり、先生の御宅に伺うことは実に楽しみの一つであった。

この「流汗鍛錬」とともに先生が屢々口にされた「進んで難局に当り、挺身事に従え」の御言葉は、私の脳裏深く刻み込まれて、生涯忘れ得ないところである。事ある毎にこれを想い起して今日までの人生を経て来たようなわけで、実に恩師の鴻恩測り知れないものがある。先生はまた御趣味も広く、御宅に参上したときなど、よく刀剣の話をされ、また書や画についても種々御教えを受けたものであるが、謡曲もまた一家を成して居られたようである。私は卒業後一年だけ上田で職を得て勤め、その節先輩の塩原克己氏(蚕六)に勧誘されて謡曲を習いはじめた。二月頃の寒い

ときと記憶するが「羽衣会」の素謡の会が横町の寺で催され、先生御夫妻はじめ、早川・佐藤春太郎両教授御夫妻その他母校関係の多数の方が参会され、私などの駈け出しは隅の方に小さくなつて、足のしびれを気にしながら拝聴していた。

この会で先生は実に堂々と難曲を誦い終られて、一同を感激させられた記憶が生々しくよみがえって来る。私が京都大学へ進学した動機は勿論自分の自由意志によるものではあるが、決心するに与つて最も力があったのは、先生と敬愛する先輩樋口琢磨さん(蚕五)との勧奨であった。生物学に無限の興味を抱かせられたのは樋口さんとの私的な交際を通じての誘掖であり、その研究を生涯の仕事として貫くべく思い立たせたのは針塚先生の御激励であった。従つて京都大学へ進んでからも度々御励ましの御書面に接し、また休暇などで帰省の際には、欠かさず先生をお訪ねして御話を伺うのを楽しみにしていた。

先生が科学の研究に深い関心を持って居られた事は今更言うまでもないが、私の京都大学在学中に(二年生のとき?)寄せられた御書面の中に、多分私を励まされる意味もあったと思うが「最近の昆虫の趨性および向性についての研究の状況を知らせてくれないか」という文面があり、当時呑気に通学していた私は大慌てで図書館に飛び込み、外国の文献などをあさつて、フールスカップ数枚に要約して御送りしたことがある。これは後年養蚕学教室の戸棚の隅から発見されたと蒲生先生の御通知を受け、若い頃の未熟な内容を思い出して冷汗三斗の思いをした事がある。これな

どは科学に並々ならぬ関心を寄せられていたと共に、後進の研究勉強を啓発された先生の一面を物語るものと思われる。

先生が国士的風格を持たれ、国を愛し、人を愛された一面を物語る想い出としては、こんな事がある。今上天皇御即位の大礼の節、先生は全国高等専門学校長の代表として大礼服美々しく、京都御所紫宸殿の広庭の儀に参列されたのであるが、その夜七条の旅宿で参上した加美好男（糸三）・吉川孟文（蚕八）・西山市三（蚕九）の諸兄および私などを前におかれて、実に手にとるよう盛儀の模様を話され、国の祝典を心から慶ばれ、また私達弟子共にそれを惜しみなく分ち与えて、共に欣ばれる御心が伺われ、実に敬服の外なかった事が想い出される。その時の先生の心からの御嬉しそうな顔が、今日もなおそのままに眼底に焼付いている。

晩年多年苦楽とともにされた奥様に先立たれて人生の不幸を味われたが、その際差上げた御悔状の御返事に切々たる御衷情がうかがわれ、男らしく立派な御文面の中に、にじみ出る人間的な至情に思わず目頭が熱くなったことを思い出すとき、そこに強い意志の人であるとともに厚い情の人でもあった先生の御人格に一人追慕の情を禁じ得ないものがある。

先生から受けた御教訓は在学中から卒業後に亘って数限りもないが、上田を卒業するとき与えられた一巻の軸物に躍動している文字に「天下に水ほど柔かく弱いものはなく、よく方円の器に従うが決してその本性を失うことはない。また一面水程強いものは

なく一度激すれば大廈を覆えし岩石をも砕く。君子は常にこれを鑑としてよく行住坐臥己を慎しみ過ちなきを期さねばならない」という意味の漢文である。私は毎年正月の床の間に、この一軸を掲げて先生の数々の遺訓を想起し、その遺徳を偲んで自らの処生の指針にしている。静かに眼を閉じれば恩師の温容ほうふつ（彷彿）として眼底にあり、謹んで御冥福を祈って擲筆する次第である。

（愛媛大学教育学部教授 農学博士・理学博士）

ポケットマネーとテニス

（大、一五、紡） 平 田 清 親

校友会の予算会議は何時も我田引水に陥り易く、と言えばそれ迄だが、各部とも吾が部の発展を期して大いに努力し、特に対校試合の多い部（当時対校試合は野球部が桐生高工・庭球部が桐生高工・東京高蚕）では必勝の意気に燃え、練習に次ぐ練習を以てして母校の名譽を益々發揮し、先輩の偉業を一層輝かしいものにして度い一念から、自然と予算の獲得に張切る様になってくる。総務で削減された予算を、少しでも多額に復活させようと懸命に努力するので、此の会議は夜を徹することが毎年の例であった。当時柔道部と剣道部は野球部・庭球部に比較して、予算が多い様に思えてならなかった。柔道部長は岡教授、剣道部長は和田教授だった。両教授とも他の部長より熱がこもっている様に思えた。其の

上校友会長の校長先生が柔道・剣道ともに奨励されて居られたので、他の部員の中には多少ひがんで見るむきもあった。そして急先鋒者には校長は野球・庭球と云うものを知らないのだとさえ口にする者があつた程である。

小沢剣道師範が着任されて間もない日であつた。雨でテニスコートが軟化して練習は出来ないし、身体をもて余した末、遂に武道場へ村田信宜君（糸一三）と二人で行つた（村田君は山口県立鴻城中学出身、当時夏の全国中等学校剣道大会で優勝した際の主将である）。そして盛んに稽古をしている時に小沢先生が来場され、先生に稽古をして戴いた。先生は「これから毎日練習を続けよう」と言われたが、「私達は庭球部ですからテニス・ズン中は出来ません」。「それでは試合だけでも出場して呉れ」と申された。ところが其の日が余りにも早く来た。ある日庭球練習をしている所に小沢先生が来られて「次の日曜に上田警察署の落成祝賀剣道大会があるので、庭球部からも参加してくれ」と言われたので、内田訓之亮君（蚕一三）外四人で出場しました。私の第一回の対戦者は岩村田警察の剣道教師だったが、軽く勝てた。私は入学以来校内校外を通じて初めての試合なのに、ついていたのか全部快勝に終り、最後の高点試合も余勢を駆つて優勝し、次の日曜日長野武徳殿の剣道大会に再び出場して、此の日も次々と制勝し、高点試合にも優勝して、小沢先生に大変喜んで貰つた。又和田剣道部長は、かのデヴィスカップ戦で勇名を轟かした熊谷・清水両選手の中、清水選手は剣道も有段者で、斯界に有名なのだと言われま

した。其の後或る日の昼休みの時校長がテニスコートに來られました。丁度其の時私はベンチにいてみんなの練習をみていました。寄宿舎側のコートはネットを地上に下して乱打をし、他の一面ではゲームをやっていました。ところが校長先生は「ネットの高いのと低いのとあるのか」と尋ねられましたので、「ネットの高さは全国一定ですが低い方はポストが駄目なのでネットが張れません」と答えましたら、「校長室迄一寸来て呉れ」と云われて一緒に参りましたら、早速小切手に壱百円也と認めて「君これで修理が出来るだろうか」、「こう迄はかかりません」、「そうか、では早速修理してしっかり練習をやってくれ給え」、「有難う御座います」と百円の小切手をポケットに入れて、清水庭球部長に報告に行きました。当時赤Mボール一打が一円五十銭ですから、百円と云えば大変な金額です。

其の後の或る日校長先生がコート側のベンチで練習を見ていられます時に、ゲーム中の選手がバラの木に突き当たりそうになりました。其の時アンバイヤーをしていた私を、校長先生は意味ありげに見られて、何か言われそうな様子で、しかも何も言わずにお帰りになりました。僕はバラの木を其の日の中に切つてしまいました。次の日校長がテニスコートに來られ「平田君よくやったね」と言われました。それは言う迄もなくバラの木の事です。木を誰よりも非常に大切にされていた校長にして、この英断同情のあるのに、目がしらが熱くなり「ハイ」と答えたのみでした。

同年（大正十四年）の秋庭球部は、桐生高等工業学校との定期

戦を本校に迎えて、職員・学生・街の人々の華やかな応援の下に、選手一同奮闘して見事に桐工を粉砕し、優勝しました。其の時校長先生を初め和田教授・石倉教授等各先生に喜びの握手を求められ、感激に浸りました。中でも平素は余り運動に関心を持っておられないと思っていた原田先生が、「平田君有難う」と涙を流して強く握手されました印象は、今なおハッキリと脳裡に強く焼きついています。

回顧すれば庭球部の合宿練習は毎年八月の半ば過ぎから、二期の始まる迄別所温泉の北向観音前半田孝海先生の別荘を無料で開放（ここは校長先生御一家が御使用後開放）して戴き、別所コートで日の出時刻より日没迄、休憩は昼食時一時間だけという猛練習を続けていました。今思えば皆よく身体が続いたと思います。別所の人達にも好意を持たれ、大変の人氣で、とりわけ高倉輝先生は良き応援者でした。桐生高工・東京高蚕との定期戦には多数別所から応援に来田された。合宿中は毎年半田先生に多大の御迷惑をおかけしました。略儀ながらここで厚くお礼を申します。

なお庭球部の予算は其の後スムーズに増額されました。然し当時の庭球部費はコート修理、ネット並びにボール代だけで其の他は全部自費と云うよりも親の歴をかじったのです。私の卒業期が近づいた頃、和田剣道部長はたびたび、紡績会社よりも趣味で世に立て、即ち剣道で生きる様にと進められました。私としては勝ち易い剣道よりも優勝の困難な庭球の方がより好きなので、紡績会社へ就職しましたが、庭球のもつれから退社して台湾に渡り、

官吏として種々の仕事をしました。其の中で橋梁設計から施工迄七八年間担当しました（土木水道課長時代）。其の模様を校長先生に手紙で御報告しましたらそのお返事に「君の作った橋を渡って見度い」とあり、それが校長先生との最後の通信となりました。なお私の庭球は其の後硬式に代わり、昨年度全国OB大会に第五位でした。今年も来る十月七、八日の両日国際ローンテニス倶楽部主催全国大会にも出場の意気に燃えて猛練習をして居ります。

（元台湾總督府技師）

二つの教訓

（大、一五、蚕） 宮 城 博

今でも生々しい印象として、私の脳裡に残っている先生の思い出は二つの教訓であります。

その一は諸君は専門の教育を受け、蚕糸業の最高技術者として、指導の任に当るのであるから学理を学ぶのは当然のことであるが、更に学校に於ける実験実習を通じて、汗に生きるところの勤務精神を涵養することが肝要であると訓されました。

その一つは人から手紙を買った時には直ぐ返信をすることであると訓された。それが出来ないような者は大衆の長として指導者として勤まらないと申されたのであります。先生は漢学者としていろいろ教えて下さったが、私が特に肝に銘じて、終世の処世訓としてゐることは以上です。

今新たに先生を偲んで在りし日を思い出しているのであります。

(元長野県蚕糸課長)

想い出の論語その他

(昭、二、蚕) 竹内善吾

入学を許可されたのが大正十三年三月だから四月の十日頃の入学式だと思ふ。入学式には当然、校長針塚先生の式辞や訓辞があったことだろうが、どうしたことか少しも記憶にない。ところがいつの頃かはっきりした月や日は勿論記憶にないが、講堂——言つたように思っているが、本館の二階中央の大教室での倫理(修身)の論語の講義が四十年近くも経った今日、なお、明瞭な印象に残っているのは不思議である。教科書に当てられたのは茶褐色の和紙の厚表紙の所謂、論語抄の点註論語大意全の私本であった。かつては国漢専門の新樂先生が講義されていたそうであったが、その退官後針塚先生が、直接講義され、且つテキストも長野で安価に印刷されたものだと聞かされたように思う。

教壇の先生は、当時は殆どの教授が着用された「ガウン」と称する(教授服とも言つたろうか)教授の正装で終始されていたが、そのガウンの長い袖をたくし上げながら、渋い、重厚な、然し音吐朗々とは言いかねるが、落ちついた、齒切れのいゝ名調子、達磨眉毛、身長に較べて、顔の方が稍長く大きく感じられる風采、独特の眼のまばたき、泰然たる容姿、なんとも言えない風格の論

語の講義は誠に印象的であつた。正に論語的風格とも言えよう。その論語調で、

子曰く、學んで時に之を習う、亦説ばしからずや。學んで時にこれを習う、習つていよく深まればよろこび亦その中にある、亦よろこばしからずやである。學は良く習熟することが必要である。凡そ學問は、自分のためにするものであるが、習熟してその道を極むるに至れば、或は遠方より友の來たることもあろう。亦、樂しからずやである。

というようなあの名調子は、當時そのまゝの新鮮さで思い出される。

この講義のいつ頃だつたらうか、聽て卒業のこともあろうが、実社会に出た場合、手紙の書き方について特に注意するよう諄々と説かれたことが未だに記憶に残っている。

「手紙は真心をこめ、字は下手であっても楷書で丁寧に、然かも誤字のないように書け、特に目上の人に対しては少なくとも名前だけでも毛筆で書くように。就中、誤字のないよう注意して貰いたい。数年前に卒業した君で、就職について依頼があつたが、その誤字の多いのに驚き、一々訂正し、同封して今後こうした誤りのないよう注意したが、今でも誤字、誤謬についてはそれを訂正して返信している。諸君も卒業した後も十分注意するように」とのことであつた。私はこのことを大変良いことに思い、自分の子供にも、それを真似て実行して來たし、戦後家庭事情もあつて、果庁から教育界に転じてからも、生徒や同僚の後輩にもそれ

を実行している。

このことに関連して思い出すのは、松本五十聯隊に入隊した後頂いた針塚先生のお手紙である。私の入隊は四月一日で、卒業が三月十五日だったと思うので可成りあわたらしいものであったし、一年志願兵最後の入隊（昭和二年十月頃の入隊中、一年志願兵は幹部候補生と改称され、幹候第一回生として除隊）でもあった訳であるが、当時、主力は満州に出兵中で、所謂、留守部隊で兵も少なく、設備その他も極めて不十分で、何となく寒々としたものであった。さなきだに社会的な物品のないところだけ、筆はおろか、墨も机もありようはない。あっても中隊事務室位で新兵等行けるところではない。例の内務班の藁布団と毛布の寝台の上で、予ねて印刷して持ちこんだ一銭五厘の挨拶状に、万年筆で金釘流ではあるが謹んで楷書の表書きをし、挨拶の末尾に、万年筆で書いた失礼を詫びて差上げたところ、折返し、二重封筒で巻紙に毛筆で

「拜復 軍隊に入隊被成候由邦家の為の御奉公洵に御苦労に奉存候、同時に生等国民の一員として感謝仕候、何卒御身御大切に母校を代表して完全に軍務を御遂行……云々」

の丁寧な激励を頂き、誠に感激したものである。この文を書くため、先生に頂いた色々のものを探して見たところ、三銭切手に2、4、10のスタンプが油じみ、古ぼけた色のまゝ出て来て感慨を新たにしたことである。

昭和三年一月除隊して、四月から当時の助手として養蚕部に倉

沢教授の下で御厄介になったのであるが、針塚先生は少々高いところ過ぎて、近づき難いものだった。尤も、大体は倉沢教授や蒲生教授からの仕事で、校長先生には直接の用件もなかったことが御話しする機会のなかった理由でもある。

蚕業試験場上田支場に転じて三年目、昭和八年頃と思うが、変な行きがよりから柄にもなく観音経や般若心経を数人のグループに講義したことがあって、その終った記念に、皆の希望で何か経文の一部を頒つことになり、先生にお願いしたのであるが、大変気持よくお引受け下さってうれしかったり、面目を施したの思い起こす。尤も、その際は予め庶務課にいられた若林さんに連絡して、画仙紙を適當の大きさに切って持参した所、校長室の応接用だったろうか、お机の上で、既に墨も摩ってあり、木の軸の大筆を握ったまゝで、達筆に六枚続けて書いて下さって、なんとも有難いことだった。その一つ「忍辱」を表装して今もなお居間に掲げて當時を偲んでいる。

その頃又、四君子図を二幅、一幅は竹を主とし一幅は菊を主としたもの、それに書幅一幅を頂いたが、書幅は出来と言ひ文章と言ひ私にはほんとうに適しているように思つて毎年、一、二回は出しては自分への教えにしている。

処ニ難処之事ニ愈宜寛、処ニ難処之人ニ愈宜厚、処ニ至急之事ニ愈宜緩、処ニ至大之事ニ愈宜平、処ニ疑難之際ニ愈宜無意。

先生も若林さんも今は亡く、唯、これ等によつて常に先生の徳を偲んでいる。

（長野県小県蚕業高等学校教諭）

師弟間の至愛

(昭、三、蚕) 山本友之丞

若い蚕種製造家の救い 矢嶋孝雄君(蚕一六)は昭和七年六

月十日の早晩に死んだ。病名は肺病である。その直前この六尺三分という長身の男は、父親半三郎氏(群馬県多野郡蚕種同業組合長)の顔や、いつになく枕元に居残っている肉親たちの顔を順々に見廻してから父親に「オレ何だか眠くって仕方がないから先にねても良いかね」と云ったそうである。「アアいいともいいとも、ゆっくりとやすみな」と言ったら「ソオ」、そう聴取れる息使いをして疲れ切ったことをひた隠しに隠そうとしてか、微かに金歯を見せてホホ笑みかけた顔をその儘に眼を閉じたが、それっきりさめずに逝ってしまったそうである。

この時離れて行く生命を引止めたい一念をこめて握りしめていた手を離し、血潮の退いて行く長男の顔から目を背けた父親は、今は亡き令息の枕元にあった蘭の絵に空ろな視線を移したが、それは若しかしたらこの絵のどこかに吾が子孝雄の魂がさ迷ってはいいまいかと思ったからだったそうだ。

その絵というのは針塚先生から贈られたもので、病に悩み抜いた孝雄の気持ちを今日の日まで支え導いてくれたものだったからである。

矢嶋のお父さんは尙志第三巻(蚕一六級友会誌中沢二郎編集昭和八年三月十五日発行)に次の如く報じている。

昨年の春良縁があつて嫁の世話をされましたので正月に取決め二月十四日に結婚式をあげたのが花の咲き終ひでした。皮肉にも翌十五日の朝発病致しまして里帰りの客にも行けず新調のモーニングや山高帽・式靴も折角作つたものの一度身につけたきり、記念の写真撮る暇もなく新妻の手厚き看護を受けつゝ病を養うて居りました。

「此の間百余日殆んど眠れぬ眠れぬで苦しみ通しました。(中略)病勢が日増しに重る許りで遂に一度の小康状態もみせず何んの効もありませんでした。(中略)彼の平常神の如く敬慕し崇拜して居る針塚校長先生に御願ひして見ようとて一書を認めて送りました。慈愛深い先生は直ちに懇ろなる慰安戒の御手紙に先生直筆の蘭の絵を送つてくださったのです。彼の喜びは一通りでなく、早速病室に掲げて朝夕眺め、先生の御手紙をくり返しては読み或いは枕の左に或いは右に最後迄枕元に離さなかつたのです。実にいたいたしい光景でした。その頃から幾分信仰に入り煩悶もうすらぎ、心の安らぎを得たようです。(下略)」

こうして「眠くて仕方がないから先きになてもいいかね」と病床を取り巻く近親の人達に対し最後の挨拶をして大往生を遂げたのである。そして「どんな回向よりもあの校長先生のお手紙が有りがたかった。あれで伴は救われました、全く先生のお陰です」と頭を垂れるお父様であった。

再教育

蚕業取締所の支所長なんザア、馬鹿にだって勤まるサと、いつもその会議をみては本気でそう思っていたんだから、今考えても唯果れるばかりである。果たせる哉自分がその館林支所長にされてみて、トテモ馬鹿で勤まる筈のものではないことを体験から感じさせられた頃のことである。

当時の館林は県境特有の人氣の荒さに加えて、政党關係がひどくうるさく、カケ出しの支所長位が、どんなにハネ廻った所で大勢が動かせる訳のものではなかった。そんなときに無準備なクセに独走するのだから、イキナリその渦巻の真中に巻き込まれて、キリキ舞をさせられたのも当り前であつた。何とか救い上げて貰つたが、もうその時はひどく怖えたり驚いたりで、お定まりの自信喪失症になつていた。その時すがりついたのが針塚校長の膝下であつたことが幸せとなつたのである。

八方塞がりみたいで何から手をつけたらよいやら自信が持てない、兎に角心の焦りと劣等感とを払拭して心の和らぎを少しでも持たないものだ。そんな氣持を申上げて何か日常のご教訓がほしいとお願ひ申上げた所、早速折り返し部厚いご返書が戴けた。

二字か三字の掲額用のモノが頂けたら僥せだと思つていたのに、それは大版の紙一面にビッシリと書きこめられた大幅の軸物用であつたには驚いた。「慎勿言人之短」から始まって、「人能如是天必相之」に至る百六十余文字で、紙面一杯にご健筆が躍り、ご慈愛が満ち溢れているではないか。この自分のことを考えて下さ

つてこんなに長時間書き続けて下さったと思うとグット欣しくなつた。その湧き上る氣持を胸にして畳一杯に拡がつたそのご教書に手をついて瞑目久しかったものであつた。

然し不肖な人間というものは仕方がないもの、手をついてめい目し先生のご厚情に溺れ乍らも肝腎のその書が読み下せない。何回やっても同じことで頭の方と終りの方は少々は判るのだが、所詮は手に負えなくなつた。困り切つていた所へ追掛けるように先生からの「親展」封書が送られてきた。それは此方の心境をお見透しの上での、ご親切なご揮毫の解説文であつたのだ。全文を六篇に区切つてその各々に読み方と大意のご説明が懇々となされて居られる。ここに全文を誌したいが割愛して最後の附記された箇所だけを記すると、

右ハ朱子訓言中ノ「拔萃」ナリ乍失礼以婆心不充分ナル解釈ヲ添附致シマシタ御参考ニ相成ラバ本懐ノ至リデス

昭和八年五月三十日

榛嶺生

尚□中の二字は書き更められて切抜が糊づけされていた。昭和八年五月は筆者が赴任して丁度一年目である。

懇請

昭和七年早春の或る朝、前橋市の竜海院前にお住まいの都丸晴治氏（蚕七、昭和十九年八月戦死）宅へ参上した。前夜「オヤジが来ているゼエ」と知らされたからだ（都丸さんの令夫人は針塚先生のお嬢さん）。

針塚先生のドテラ姿にはその時始めてお目に掛ったが、それ迄どうもスパスパッと裏を喰いながら、ウン、ウンと云った短い返事をするこの校長は、苦手中の苦手だった。それがアグラをかいでニコニコ乍ら、何かと話題をみつけては話し掛けて来られる。新所帯の味はどうかとヒヤカされたりして面喰ったことを覚えてゐる。

「もう直きに來ますぜ」という都丸さんの進言を素直にきかれて着替に立たれた直後、成程と思う位に県の主任技師の永田さんが訪れてきて、筆者と一ツ二ツ雑談していた所へ出て来られた先生は、筆者よりも下手の位置にビタリと座られて、御挨拶の後手をつかれたままの姿で、イキナリ新卒業生諸君の採用方のご懇請が始まったには驚いた。

Q 君は当県出身者で家庭もよいこと、学業が申分ないこと、運動選手をしている位で生活の節度が正しいこと、その上馬術を志している当世向きのたのもしい軍国青年であること、等々を鏘のある声で列挙してご推薦の辞を続けられた。タカガ小役人のポスト一ツ位とハラ／＼してそれを眺めていた筆者は、ヒョイトイヤあるいは自分の時もこうした折り入ったご挨拶が交されたのかも知れないゾと思い、今更の如く頭を垂れたことであつた。

(元宮城県蚕糸課長)

剣の道は心を磨くに在り

(昭、三、糸) 三 谷 勝

日本の道德基準は、太平洋戦争を境として、東から西へと大きく変貌した。戦前は論語とか葉根譚とかが旺んに読まれたが、戦後はそうした書籍は姿を消して、バイブルとか成功法とか処世術とかの本が親しまれるようになった。針塚先生は論語を実践的に教えられた。他の教授の講義は、ノートをとるとか教科書又は参考書をもとにすゝめられたが、針塚先生はそうしたことを一切廃して、週に一時間実践道德学という学課で、論語をもとにし学生を訓育されることにあつた。

学生時代に人物をつくり上げることが目的であつたと思うが、先生の目的に添い得ないで、不合格のまゝ社会に押し出された私は、時にふれ先生の教訓を思い出す必要がある。一年間週一回の講義であつたから、全部を記憶しておれば莫大なものであるが、自分に不都合なものは忘れてしまひ、都合のよいもののみ覚えてゐるのであるから、次に述べるような思い出は、先生の教訓のほんの一部分にすぎない。先生は「君子は器ならず人を器にす」という言葉をしばしば述べられた。学問や技芸に長ずることはもとよりであるが、それと共に人を使う人物になることを、学生にたゞきこまれたのである。したがって従来の所謂秀才型よりも、腹のすわつた見識型の学生が好きであつたようである。又「身を

挺して事に従え」という先生の教訓は熱をふくんで、今でも忘れられない。

製糸一回卒の中沢周蔵さんが、上海で紡績工場に勤務していたとき、支那人がストを起こして工場を占有したことがあり、幹部は身の危険を感じて逃げかくれた中で、当時一介の技術者でありながら、支那人の包囲の中へ飛び込み、「中沢を殺すなら殺せ、自分の背後には一億の日本人がいる」と豪語してストを収拾し、一躍大幹部に昇格したという実話が、先生のお得意の一席ものであった。

信州上田の冬は零下何度という寒さがつづくが、その中で一番寒い一月末を選んで、三週間に亘る柔剣道の寒稽古が挙行されるが、未明五時開始であるのに、剣道部長和田仙太郎先生、剣道教士小沢丘先生と共に、針塚校長の姿が、剣道部の板の上に、毎朝現われた。しかも素足である。当時六十才に近かった専門学校の校長が、身をもって酷寒と闘い、学生を鼓舞奨励されるのである。そのお姿は尊厳そのものであった。

人生社会、私のようなものにも幾度かピンチに遭遇するようなことがあったが、その度毎に「難局を買って出た中沢さんの話」や、未明厳寒板の間の先生の素足を思い浮べて、これ位は難局でもピンチでも何でもないではないかと、自分を叱りつけて来た。

その剣道部の道場には「正其心」と言う八代六郎大将筆の額が掲げられていた。先生は「剣の道は心を磨くことにある。技術ではない」としばしばさとされた。したがって勝ってもそれが邪剣

であれば潔しとされなかった。正々堂々と戦えばよいのであって、勝負は論ずるところではなかった。対校試合があっても、勝負を聞く前に、試合振りが立派であったか否かを先に聞かれた。上田古城祭日の呼びものに、剣道草試合があり、見ている中客気にはやって飛びこんでついに優勝したことがあり、しまったと思ったが、案の定翌日校長室に呼ばれて、「君子のなすべきことではない」と叱られた。和田先生が後日私宅で、「大西郷伝」の本を副賞として私に下されたが、針塚校長にしる和田先生にしる、学生の取り扱い方については実に偉いところがあったと、今思い出しても臉にあついものが流れる。

渋川を通る時、私は車中からでも路上からでも、針塚先生の墓の方向に向って、姿勢を正して最敬礼する。それは先生の教訓に添い得られなかった不敏な門下生として、深くお詫びをする気持ちからである。もし先生御健在ならば、ついに君子になり得なかった愚かな弟子をあわれんで下さるに違いない。

先生は人生の勝敗は決して問われないで、そのマナーをのみ問われることであろう。
(日本製糸協会事務局長)

蚕専の落第坊主

(昭、四、糸) 小林 運美

昭和三年桐生高工と母校蚕専各種運動部との定期試合が行われ

た時のことである。当時私は柔道部の主将として出発にあたり、針塚校長に挨拶に行くと、先生は「この試合は両校のスポーツを通じての親善の爲に行われる行事であるから、勝敗ということよりスポーツマンシップを充分に考えて行動してもらいたい、即ち武士道精神でしっかりと戦ってきなさい」と父が子供に教える如く感銘深いお話があった。

ところが桐生高工に遠征した我が各種運動部は殆ど大部分が試合の結果は負けであった。唯勝負に負けたというのではなく審判官の判定がすべて桐生側に有利に行われたので選手は勿論、応援の先輩や学生は喧嘩ごうごうたる騒ぎであった。我が柔道部の各選手も完全に投げとばして一本になるべきものも、審判官は横を向いて知らん顔。只一人副将の西田君が敵の首をしめて完全にまいらせたのが一本だけという始末。これに反して桐生の選手の掛けた技はちょっと尻もちをついた程度でも一本とされてしまった。我が柔道部の先輩で群馬県出身の梅沢三郎氏（糸一二）は涙を流して審判の不正を詰めよったがこれも全然問題にされなかった。私も主将として最後に立つ事になったが梅沢氏や先輩各位はこんな馬鹿らしい試合は中止して帰ろうとまで云われた。私は針塚先生の出発の際のお言葉を思い出して、どんなに不利な立場に立っても全力を尽くして戦うべきと考えて試合を完了した。勿論我が軍の敗北は云うまでもなかった。後で各部の戦況を聞いてみるといづれも同様な結果であった。

帰校後校長室に伺って桐生側の行為を針塚先生に報告した。針

塚先生は我々の報告をじっと目をつぶって聞いておられたが、急に引出しから巻紙を取り上げられ、何か書かれたが筆を持った手はブルブル震えて居た。この時の先生の姿は目に残っている（桐生高工西田校長宛の手紙らしかった）。そして我々に向って「諸君は良く親善試合に対する考え方を厳守して如何なる場合にも暴挙する事なく帰ったことは、型の上の試合には負けたけれどスポーツマンシップ、武士道では完全に上田の大勝利であった。良くやってくれた」と申されて我々に扇子の上にそのことを記して記念に下さったが、その時の感銘は今でも眼前に彷彿として忘れがたい思い出であった。

もう一つ私と針塚先生の間には特記すべき事がある。たしか昭和二十二年頃のことと思われるが、先生は上田の学校を退任されて郷里群馬県の渋川在におって、喜寿のお祝があった時のことである。多数の同窓生に混って、このお祝いに馳せ参じた。お祝の儀式が終わってから大勢の先輩各位が先生を囲んで思い出話をされておるのを、私は後の方から聞いておったが、話がすんで皆立上った時先生は私を呼ばれた。先生は「君は相変らず元気だネ。選挙の発表を徹夜で聞いていたヨ。良かったネ」と我が事のように、喜んでいたよいた。そこで私は「蚕専の卒業生として国会に出るといふことはどうも先生の教えをはき違えた大馬鹿者です。幸いにして代議士には当選しましたが、蚕専の卒業生としては落第坊主に等しいと思います」と申し上げるとその時先生は急に大きな声で「ははあ蚕専の落第坊主か、それはおもしろいネ」と云われ、

その時私と同選挙区で当選された唐木田藤五郎氏（糸六）もそこに来合せ落第坊主が二人集ったといつて大笑い又大笑い。今もって私は蚕専の落第坊主。

（ボーイスカウト日本連盟事務局長・科学技術庁参与）

槍の穂の短刀でむく林檎の皮

（昭、四、糸） 西田勇三郎

厳寒零下五度、積雪三尺という真冬の午前六時、道場の中では柔剣道寒稽古の猛烈な響きが溢れている中から、いずくともなく低いが底力のある謡曲の節音が洩れ始める。『オッ』校長先生が出席しておられるな。まだうす暗い剣道師範席の横で、稽古中の生徒を熱心に見守られる針塚先生の姿は、私共の尊敬の象徴であった。寒い板の間に正座して見ておられるうちに、気嫌がよいと謡曲の独吟がひとりでに浮かぶ様であった。

× ×

桐生高工と一年交代に対校試合（柔道・剣道・庭球・野球・卓球この他に辯論を加えた年もあった）を行ない、昭和三年十月には上田から全校大挙して桐生に赴き、各種の試合が行なわれた。その中特に柔道は連年大勝していたので、桐生側では『本年こそは』と言う気持もあったのか、当時の審判は桐生を勝たせる為のひどいもので、応援の今は亡き梅沢治三郎先輩（糸一二）などは泣いて腹を立て、場内は殺気を含む程のもので、実力の大差にも拘

らず上田が負けた。帰途小林運美君（糸一六）と小生は飯塚国三郎先生に模様を報告し、当の審判者は講道館を破門になったと聞いたが、その戦況を聞かれた針塚校長は、上田の生徒が正々堂々と闘ったことを喜ぶと共に、桐生の態度を以て上州男子の面に泥を塗るものとして憤慨せられた。そのお顔、常に「学生は正義を崇ぶべし」と教えられたその時のお顔が今も目に浮かぶ。

私共は負けたのに善戦選士の為にと書いた扇子を頂いた。その翌年からの試合は当時柔道部長であった岡徳治郎教授の諮問に対し、対校試合に反対した私の意見が容れられて、全国高専大会に顔が会う迄遂に試合は中断した。

× ×

私共は度々先生のお宅を訪ねてお話を伺い、時に夕食を御馳走になつて帰ることさえあった。

会社に就職してから、他の学校を卒業して来た同僚にこの話をしても、本当とは信じてくれず、私のホラと聞き流された。嬉しくも亦懐かしい思い出である。槍の穂で作った短刀でリンゴの皮をむいて頂いた奥様の手が、御夫妻の学生に対する愛情を、痛い程に示されていた。

× ×

卒業の日、小林運美君と二人で画仙紙を持参先生の揮毫を乞うた処、先生は『今習字の練習中だから、もう少し上手になったら書いてあげる』と言う返事で、紙を預けた儘卒業して行った。

昭和九年十月先生から突然毛筆書の葉書を頂いた。それには

「君からの依頼の書が出来たから送った」と言う案内状だ。数日を経て紙筒を受取った。(小林君からも先生の書を頂いた旨の手紙が来た。)卒業してから六年目である。

「青年の熱汗は世俗をぬぐう」と書いてあった。須臾もおろそかにせず、若い者に托して悠々たる先生の真情であつたと思う。

内に満々たる気概を含み、溢るゝ愛を以て育成し、生涯を上田の学校に捧げられた先生の人格が校風を作り、卒業生の胸に一本の太い筋を通したものと信じ、更めて偉大であつた針塚先生を偲ぶ次第である。

(三和建築KK取締役社長)

社会は毎日々々が試験

(昭、四、糸) 中 島 暹

針塚先生と云えば教育者即ち先生と云う呼びかたが最もよく当てはまる。自他ともにゆるす全くの教育者でつきると思う。おそらくご自身もそのつもりであり、誰からの感じもそうであり、私一人の感じではあるまい。

晩年上田市長の椅子のうわさもあったが、団体行政と教育行政とは違ふの一点張りで押しとおされた話は、先生の面目躍如たるものがあると思われる。数ある卒業生に対する書も、総べて相手の人物をご覧になって、その人相応な教育的内容のものを贈られている。私は「万象即我」なる額をいただいたが、今日ふりかえ

って考えて見れば、私にはうってつけの教訓であり、卒業のはなむけであつたと大いに感謝申し上げている。この言葉どおりの気概をもって処しておれば、私もいま少しくはましな人間になつていたろうとは足らざる人間のさん悔かも知れない。

少し下賤であるがトイレで用を済ましボタンをかけながら戸外に出た途端先生にお目見えしたとき、さり気なく通り過ぎられた先生が、次のなにかの機会にそれが「紳士たるものは行動も紳士らしくせねばならない」との訓辭となつた。なるほど先生の觀察はまことに徹にいったものと肝に銘じて今日でも同僚との笑い話しや教訓の代弁に花を咲かすこともある。それだけにご自身も身だしなみには、たえず注意されたくしく、教え子の就職先等訪問される際には、必ずと云つてよいくらいモーニングを着用されたもので、私も東京へ出てからそうしたお姿をしばしばお見受けしている。

学生時代は試験の時ばかりが試験であるが、一步社会へ出ると毎日毎日が試験であるから、大いに努力すること、また額に汗し手に血豆をつくつて励みたい等は、よく卒業間ぎわに壇上から叫ばれた教訓で、多くの教え子はご存知の筈である。平素草とりにしる柔剣道の寒稽古にしる、率先躬行して範をたれたことは誰も知るところである。晩年郷里群馬での晴耕雨読の際も、訪れる教え子を慈父の愛を以て温顔親切に導かれたこともよく知られたところで、終始一貫教育に専念されたのが先生である。

以上は先生に対する私にとつての思い出の一つである。

(信州大学繊維学部庶務係長)

宇垣總督と針塚先生

(昭、四、糸) 由井 千幸

京城の冬は三寒四温がはつきりしていた。昭和十一年一月下旬の四温日に針塚先生が四日間京城にご滞在になられた。第二日目の十一時半に總督府へ到着された。わたくしは先生の名刺をもって秘書官附属室にゆき、かつてベルリン留学当時お会いしたことを手短かに述べ、宇垣總督に面会を依頼したところ、大変こころよくお迎えして下さることになった。十二時から針塚先生に従って同窓の先輩矢沢茂登一さん(蚕一)とわたくしと三人で秘書官附属室に入った。わたくしたちはそこでお待ちしていた。針塚先生はものなれた足どりで總督室へ入られた。その頃朝鮮總督の宇垣さんは、農村振興のため自力更生運動を掲げて半島統治に多忙であられた。宇垣總督と針塚先生はお二人だけで約三十分にあつてお話された。それは明治三十九年に先生が文部省の視学官でドイツに留学し、宇垣さんも陸軍の少壮士官としてベルリンに留学中のことであり、わが国のめざましい躍進時代にあつて、日本の将来を背負う人材が、政府要路から海外に幾人も派遣されていて、時々お会いすることがあつたそうである。それから三十余年過ぎた今日、この京城で再会する機会を得られたのは、奇縁でありましょう。お互いに忘れず、よく覚えておられ、あれこれとお話がはずんだようである。もっとゆっくりに午餐か晚餐を一

緒にしたいとの宇垣總督のお言葉もあつたようだが、都合があつてそれはとりやめになった。先生は午後一時から府民館で講演せられ、会する者百余名、三時の急行列車で水原の農事試験場に行かれ、七時にお元気で宿舍備前屋へ歸られた。お疲れの様子もななく先生は十人ほどの教え子に囲まれて夕食を共にされた。それは故郷を遠く離れた子供が親を迎えてよろこびはしゃぐのと全く同じであつた。その日總督府において新聞記者とのインタビューがなされ、その談話が一月二十四日の京城日報の夕刊に四段抜きの大きい活字の見出しで掲載された。―上田蚕糸専門學校校長針塚長太郎氏は鮮満蚕糸業視察のため二十二日來全鮮各地にわたつて蚕糸業の実情を視察中であるが、二十四日日本府を訪い次のように語つた。『大正十三年に朝鮮を見たことがあるが、十三年前の當時と今日を比較すると実に雲泥の差である。殊に山村の緑化と工場の増加、道路の整備など何処を見ても産業朝鮮の躍進の姿が現はれてゐる。私は朝鮮の蚕糸業の将来は実に有望であると期待してゐる。繭の生産費の七割六分といふものは労賃と桑葉代で占めるのだから、この点余剩労賃は極めて安く、桑代も土地安で有利だから、生産費も内地に較べて遙かに安い。朝鮮では春夏秋蚕共に農閑期になつてゐるから好都合だ。現金収入の多い点からも農村振興には第一等である。さて朝鮮の蚕業が発達すると内地の蚕業は打撃を受けるのじゃないかと心配する議論もあるようだが、朝鮮の蚕業がそこまで発達するには尚ほ三十年を要するから差當つて心配する必要はないと思ふ。蚕糸行政について現在朝鮮の実

情は本府が中枢となつて非常に合理的に整備されてゐるようだ。蚕業の国家的統制は益々必要となつて来たが、朝鮮ではこの点うまく行つてゐるようだ。」(原文による)

第三日目の早朝にわたくしが備前屋を訪れると、先生はまだ丹前のまま机に向つて盛んに毛筆で蘭を書かれていた。簡単だから君もやるとよいとおっしゃられた。九時に宿舎を出られ、自動車の中へは湯タンポと毛布を入れて、雪の街路を江原道へ向かわれた。

第四日目は市内視察とご挨拶をなされた。その夜は旭町の川長という料亭で同窓生だけの宴会が催された。十一時半過ぎまで飲む談ずで、先生も壯者を凌ぐお元氣さで、つきつきとよくお話をせられた。一寸やりすぎたほどでまことに盛会であつた、針塚先生をはじめ矢沢茂登(一蚕一)・丸山俊一郎(蚕一)・北沢茂(蚕二)・磯野良知(蚕二)・尾見祐八(蚕五)・牧野春雄(糸一〇)・内藤次郎(糸一四)・工藤見吉(蚕一七)・羽吉(現鈴木)正雄(蚕二二)・仁尾幾朗(蚕二〇)・金落禎(蚕二一)・沈興燮(蚕一七)・朴均主(蚕一九)・榊原敏男(蚕一九)・林謙一(糸一八)・瀬脇休信(紡一〇)・小笠原安重(蚕二二)・伊藤猛(糸二〇)・大石唯男(糸一九)の諸氏とわたくしと二十人であつた。

なお私を通して針塚先生が宇垣総督にご依頼された書のことについて、その後ほどなく総督がご退鮮になられた為ついにその機会を失したことは、私としてまことに申訳なく思つてゐる。今こ

こで針塚先生と宇垣総督を追想し、前記同窓生諸氏をまぶたに浮かべ、限らないつかしさのこみあげてくるのをどうすることもできない。
(農林省蚕糸試験場岡谷製糸試験所技官)

率先垂範

(昭、四、糸) 馬場 長市

私が針塚先生の教育を受けた年代は昭和元年から昭和四年の春迄の三カ年であり、先生の母校御在職二十八年の内、十七年目から二十年目迄の期間で、先生の五十才台の最も円熟された年配であり、而かも壯者を凌ぐ御壯健な時代であつた。

先生の思い出も既に三十数年前の事であり、私共の記憶も大部うすらいで来たが、今でも母校三年間の学生時代に訓えられた教訓は、ハッキリと憶えて居る。それは卒業後実社会に出る私共が社会人として如何に対処すべきかの、人生行路の基盤となつたものであり、それは実に針塚先生の訓育・処世訓、並びに先生的人格から培われた母校の校風の賜物であることを思うとき、茲に改めて感恩の念に燃える次第である。

先生は一週間一回の修身の科目を担当され、私共は親しく先生の御講義を聞く機会を与えられたが、先生は講話の内容を巻紙に筆で書かれたものを持参して来られた事を記憶する。そして訓話の内容は高等教育を受けた者の、社会人としての教養・処世訓・

社会常識等を懇切丁寧に教えられた。そして社会人として世に出た場合の座右の銘として「進んで難局に当り、身を挺して事に従え」と教えられ、先輩諸兄の率先垂範の例話を幾度か挙げられた。又常に「汗に生きよ、汗なき世界は暗黒なり」と勤労の貴さも訓えられた。恐らく先生御在職中の学生は之と同一の教育を受け、又先生の御人格が母校に伝統の校風を作り、やがて、之が社会人としての千曲会員の共通の特質となったものと信ずる。よく「上田の卒業生は仲々よく働く」「よく頑張る」「卒業していやな仕事に当る」等の批評を耳にするが、これ等は実に先生の訓育即ち母校の校風から醸成されたものであると信じて疑わないものである。

母校に於ける武道の寒稽古は年中行事の一つであり、私も三年間寒風について柔道の寒稽古に皆勤したが、先生も常に「い」の一番に此の寒稽古に出席され、率先垂範の実を挙げられた。即ち教壇に於ける訓育を常に身を以て実践されたもので、学生の先生に対する尊敬の念は愈々高まり、寒稽古の出席率は否応なしに上昇し、之等三年間の学生生活の努力の積み重ねが、母校卒業生をして一生を通じて質実剛健に終始する気風を作ったものと思う。

私はクラスの総代として先生とは度々校長室に於て接する機会があったが、先生は巻紙に毛筆で手紙や其の他の書き物をされて居るお姿に接することが再三であった。此のお姿は戦前校長室の前庭に設置された銅像にそのまま再現されて居ったが、今次の世界戦争で供出され、其のお姿に接する機会がなくなったことは、

洵に遺憾に堪えない。是非復活される事を希望してやまぬ次第である。

三年の学生生活を終り、私は昭和四年四月郡是に入社して各事業所を転勤の後、今日に及んだが、入社後、会社での社員教育の根本理念と先生の訓えとは、共通点が随所に見出され、今更感銘を深くするものであるが、社会人としての処世訓に對し洵に適切な訓えであると感じ、感謝の念を禁じ得ないのである。

卒業後母校を訪れる度毎に、校長室で先生にお目にかかるのが常であった。昭和七年郡是から紐育駐在員として米國行を命ぜられた時、出発に際して先生に御挨拶に参上したことがあった。其の時先生より海外滞在中の心得に就き誠に打ちくだけたいろいろのお教えを承わったことがある。学生時代以来御尊敬そのものと考えて居っただけに、誠に適切なお教えであると肝に銘じて渡航し、二年半の海外生活を無事に過ごして目的を達し、帰国したことを覚えて居る。真に清濁併せ飲む先生の寛容迫らざる御人格に接し、重ねて肝銘を深くした。

中学時代に人生行路の倫理を学びながら実社会を知らずして母校に入学し、先生より社会生活に對する教養及び処世訓を受けたことは、終生忘れられぬ感謝である。

最後に先生より卒業アルバムに頂いた座右の銘は「道芝も踏まれざりせば斯くばかり強きは茂らざらまし」と、忍耐の大切なることを訓えられた。時代は移り変わり世は將に宇宙時代となつても、人倫の道は変わらぬものであり、先生御教訓の本質は終生

忘れることなくこれを実践してこそ先生に対する感恩の途と思う。

(郡是製糸KK取締役)

不掬糞水不能成善農

(昭、五、蚕) 田 口 亮 平

私たちの学生時代、一年生と二年生の倫理の講義は針塚校長が担当せられた。旧本館の二階中央、現在の第四番教室は当時上田蚕糸専門学校の講堂であり、同時に合併教室であった。講堂が新築されて、新講堂で行われた卒業式は、私たち昭和五年の卒業生が最初である。

針塚先生の授業のときには先生はいつも黄色の飾り紐のついた黒いガウンを着、颯爽としてこの合併教室の入口に現われ、力強く教壇に向って進まれた。先生の講義は系統立った倫理学というようなものではなく、いろいろな問題、たとえば時事問題とか、当時の卒業生の活躍の具体的な事例とか、日常生活とかについて話された。手紙の書き方についてはじめて知ったのも先生のこの時間であった。しかし多岐にわたった先生のお話の内容は常に一つのフィロゾフィで貫かれていた。

「進んで難局にあたり身を挺して事に従え」

というお言葉は何度か先生の口からきかれ、私たち学生は実例をもってこの言葉の意味を先生からたたきこまれたのである。

私たちは先生の倫理の講義に魅惑された。毎週の先生の時間が

待ち遠しかった。三年生になって先生の倫理の時間がなくなったときにはがっかりした。講義中に時々質問を発せられるからうっかりしておれない。二年生のときだったと思う。先生は

「歴史ということばはドイツ語で何というか」と質問された。

誰れか答えるかと思っていたが誰れも答えそうになかったので、

私は「Geschichte じし」と

とおそろおそろ答えたら、先生は満足そうにうなずいて黒板にその文字を書かれた。当時私はゲーテの「若きヴェルテルの悲しみ」独和対訳の書物で、勉強しかけていたので、同書の冒頭の

Was ich von der Geschichte des armen Werthers nur auf-finden können, lege es euch hervor.....

という文章を暗記していたので、先生の質問に偶然答えられたわけである。こんなことが先生の講義の思い出と共に、私の専門学校時代の学生生活の思い出と連らなっている。

先生は時々圓場実習をしている学生のところまわって来られて、一人一人に言葉をかけて、汗にまみれている学生を激励された。分担区に草でも生やしていると、次の倫理の講義の時間には早速話題としてこのことを取上げられた。

「糞水掬せずんば、善農と成る能わず」

この言葉もしばしば先生の口からきかれた。一人一人の学生が校長である針塚先生に接する時間は、それほど多かったとはいえないかもしれない。しかし教室と圓場とでうけた先生の感化は実に大きなものがあつたことを、人生の半ばすぎて私はしみじみと思うのである。労働の貴ぶべきこと、責任を重んずべきこと、困難

をさげざること、困難な仕事でも最後まで頑張り通すべきことなどを、学生生活の間に知らず知らず教えられた。先生のこの薫陶が、母校の校門をあとにして、社会に巣立っていった何千人の卒業生の、その後の活動にどれだけ大きな力になっているか、測りしれないものがあると思う。

今年の夏、私は名古屋大学へ講義に出かけた。私の上田の学生時代校外実習に行った菊谷市が農学部近くのので、一日講義の間の余暇をさいて思い出の地をたずねた。そして私の実習先のS家の御曹子であったS君に三十年ぶりで会った。同君は私より数年後の上田の卒業生で、卒業後満州国の柞蚕関係の官吏として、重要な地位にあつて活躍していた。終戦後裸一貫で引揚げてきて、故郷で悪戦苦闘の末、現在では良妻賢母である夫人と共に、立派な一流洋品店を経営しておられる。近くの知立町で杜運隆々とした鉄工所の社長であるO氏と二人で、S君ご夫婦にご馳走になりながら、S君ご夫婦の今日までの苦闘の様子をきいて私は感激の涙を禁じえなかった。製糸科の卒業生であるO氏は、製糸業から鉄工業に転向して、今日に至るまでの苦心を話された。同氏の製品の一つにポンプがあるが、会心の製品ができあがるまで七年間頑張られたそうである。そして今では同社の製品と同じ種類のポンプでは、ほかのメーカーは競争にならず製造を中止してしまったという。O氏は

「最後まで頑張るものが勝ちますよ、どんなに苦しくても最後まで頑張る。これが針塚精神ですよ」

と強調した。私はO氏・S君にまざまざと針塚精神の体現をみた。私は深く頭をたれた。

針塚先生の創設された上田蚕糸専門学校は、創立後五十年を経過した。その後身信州大学繊維学部は創立五十周年を契機として、繊維産業の趨勢に応じ、新たな発展の一段階に第一歩を踏み出した。養蚕科・製糸科の二学科をもって出発した母校は、現在では繊維農学科・紡織工学科・繊維工業化学科・繊維機械学科の四学科となり、新設の繊維機械学科の建物を新築する槌音は、高らかに学園にこだましている。かくて学園の姿は変わっても針塚精神は母校の伝統として長くうけつがれるであろう。

(信州大学繊維学部教授 農学博士)

「また来いヨ」のお言葉がお目にかかった最後

(昭、五、蚕) 滝 口 昇

当時六十才近い先生が時々学校から近道を走り通して帰宅することもあるとの話だった。なお風呂から上られて四つん這いになり、座敷中を三回位禪一つで馬の様に走られるのを一度拝見致したことがある。そして「本能的な運動も滝口君必要なんだよ」と澄まして言われた。学校からお帰りになつて、人糞尿を桶に入れて居られた時、私は丁度お伺いした。奥様が「滝口さん肥くみは

出来るでしよう、お父様が又始めたから代って頂戴、いつもあわて者で汚して困るのヨ」と言われ、私はあわててしかも裸足でとび出して「先生僕は上手ですからやります」と言っても、頑として聞かれず、「君、汚れるヨ、ドイタドイタ」と言われ、私は仕方なく足を洗って廊下で拝見して居った。其の頃二畝程の畑が裏にあって馬鈴薯、ネギ等を自作して居られ、先生か、民一様がお作りになって居ったらしい。民一様(蚤一六)は先生の甥であり、卒業迄同居せられて居った。その民一様も戦死されたと承る。その民一様が在学中奉安殿に慎重なる最敬礼をなさることは学校での評判となつて居った。先生は何と言つても潑刺たる御元氣の人であり、柔道寒稽古の納会頃はよく飯塚八段(当時)を御家に宿泊願つて、好んで自分が朝御飯を早起きして炊く、そして師事するのが例であつた。それに心から嬉しそうに歓迎された。先生は時々御経も読まれた。暗記されて居ったのが、若心経と思う。先生の感化か？私は学生時代の三カ年と蒲生先生の助手一カ年、

本陽寺へ月に三回は訪れて読経し、御説教を聞いた。又先生の御紹介により小根山義山師を知った。奉天にて十五日間の座禪を組んだのも先生の御感化だつた。唯謡曲だけはすめられたが之は遂に入れなかつた。先生の俊寛(謡曲)は「如何にもウツトリと感じ入る」とは、奥様の感懷であつた。先生が俊寛にみえると言ふお話であつたが、聞いたことはない。唯謡曲は成る程良いナア！と思つたのは卒業式の祝賀の時か？石倉先生の「桜狩り」のホンの小節が実にたまらなく優雅で壮重であつた。針塚先生のはた

びたび聞いて居る為か、吾々には珍しくなく又深奥な名人芸が理解出来なかつたのかと思う。

私が仙台の宮城農学校に在職中、先生がおいでになり、県中の卒業生がお迎えして私の居った宮農から県庁・松島等を御案内致した。此の頃伊達家累代の墓地大念寺山麓に九尺二間の藁ぶきの一軒屋に、老母と二人、女絵書きが貧しく住んで居った。美貌と清廉の上野美術出の才媛だが、変人を通じて居った。先生の東北巡りを知つて此の画家に「好きな画を書いてくれ、価はいか程でも宜しい、恩師の旅情を慰めるためのプレゼントだ」と頼んだ。その時その画家曰く「私の父が支那へ渡る時に記念に書いた楊貴妃です。四十円にて買ひ手があつたが売れません。」とそれを見せて呉れた。髪も手足も不潔な娘で年頃廿五、六才だが、顔も身体も立派な者だ。結局針塚先生に書いたものは「元禄娘が橋上にて叢雲の半月を仰いで居る」凄絶艶麗な筆致であり、五尺巾二尺の絹地、価二十両と言ふ。当時私の月給は七十円だつた。私は喜んで之を求めて先生に差上げた。余りお喜びもなく簡単に受納下さつた。他の卒業生の前だからであつたらうか。其の後奥様と仙台を車中通過された時「オイお前こは瀧口がサンザヨタをした街だよ」と言つて奥様を笑わせたと言ふことを後で奥様から聞いて、私は正直に女絵かきのことを話して奥様を笑わせたが、實際大いに「ヨタをした」三カ年の仙台だつた。高橋儀三郎先輩(蚤四)等は種屋の多忙を省みず、先生のお伴をして歩いて、毎晩の宴会続きと言ふ訳、しかも眉毛だけ剃つて歩いて居つた一種の針塚信者の口であ

った。

修己寮の食堂の入口に先生の書が額になってあった。漢文で「敬せざるなかれ嚴として想ふが如く言辭を安定にすべし」とあった。之を私が先生の前で空で言ったら大へんお賞めにあずかった。農場にて岩崎先生がこれは校長の文だと言って「糞水を掬せずんば善農と成る能はず」と教えられたことも思い出す。若い時は夜美髭を型にはめて寝られ、日曜日には友人とサイクリングを樂しまれたと言う。郷山に帰られてから二回先生を訪れた。奥様には一度も逢えず残念であり、淋しかったが、先生の女婿都丸晴治様御一家が同居されて居った。酔うて夜分訪れたのが第一回、応接間で、「満州の失敗談をお話に参りました」と言う訳だ。第二回は都丸様御出征中と思うがふち枝様の御子息女も皆優雅な人々許り、先生は等身大の奥様の額を仰いで眠れる様な寢室に休まれて居ったと思う。私は其の室に二回寝かして頂いたが、額の奥様は何とも言ってくれなかった。ふち枝様はバスガールの様な名口調で二階の窓から此の居宅の説明をしてくれた。その頃先生はユダヤ民族の研究をなさっておられた様だった。お別れの時二、三丁もステッキをつきながら送って下さった。「又来いヨ」と言われたが之が最後であった。終戦間際の頃のことだ。

(元満洲国立療源国民高等学校長)